



5月30日、新日本婦人の会中央本部

ただし今年度については「コロナ」による「緊急事態宣言」をうけて、4月に予定していたらいてうの家オープンを7月4日に延期、「らいてう忌」や「森

「より多くの方にらいてうを知っていただく」ことをめざし、21年の「らいてう没後50年」記念につないでいく方向を確認しました。

5月30日、第21回通常総会を開催しました。新型コロナウイルス対策に配慮した会議となりましたが、多くの委任状をいただいて総会は成立、すべての議事を終了したことをご報告いたします。会の活動については、19年度にらいてうの家の大改修工事をみなさまの多大なご寄付によって無事に終了できたこと、新婦人協会発足100年記念イベントを主婦連・市川房枝記念会などの諸団体と共同して成功を収めたことなどの成果を確認し、20年度にはこの成果を引き継いでらいてうのこころざしを活かす活動に取り組むとともに、「

(総会報告) 「コロナの時代」乗り越え、没後50年を展望 会長 米田佐代子

平塚らいてうの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

のめぐみ講座」7月の「らいてう講座」などの行事も中止を余儀なくされています。7月以降のらいてうの家の運営についても検討しましたが、「困難はあるが、『コロナ』で露呈した人類史的危機に対し、らいてうの『平和と協同』をねがう生き方を学びつつ現実に立ち向かう活動の場をなくすことはできない」という立場から、できる形でオープンすることにしました。9月28日予定の小森陽一さん講演会(上田市)はぜひ成功させたいと思います。

なお、「没後50年」企画については、かつてらいてうが「協同心こそ人類共通の本能」と言ったことを思い出し、「コロナの時代」ともいわれる現代にあつて噴出してきた人種差別問題や大企業の利益優先から生まれた貧困・格差を克服し、「核戦争」の危機を乗り越える平和世界への展望を見出す方向で検討したいと思っています。

最後に、会の財政は会員の会費ではまかなうことができず、会員のボランティアおよびこれまでも多くの方がたからのご寄付と「家」オープン以前から含めて積み立てて来た「基金」の運用によってかろうじて成り立ってきたこと、会員の高齢化にともなう活動上の困難も解消されていないこと、今後のらいてうの会とらいてうの家の活動をどう発展させるかが大きな課題だということも

率直に申し上げます。どんな困難に出会っても失望しなかったらいてうの灯を灯し続けるために、みなさまからのいっそうのお力添えをお願い申し上げます。

今年度役員

会長・米田佐代子 副会長・井上美穂子、折井美耶子、杵掛美知子、小林明子、堀江ゆり、三留弥生 事務局長・金輪きみ子 理事・青木俊子、飯村しのぶ、植草充代、北澤有希子、木村見江、久野泉、倉橋純子、小林典子、竹花みい子、宮下昌子、山田繁子、若尾伸子 監事・佐久間由美子、由比ヶ濱直子

『紀要 第13号』

8月発行予定 頒価700円

「コロナの時代」を生きる人間の力
—21年平塚らいてう没後50年を前に考える— 米田佐代子

特集 記録 新婦人協会発足100年記念のつどい

主催者挨拶 米田佐代子
基調報告

「女性たちが社会を動かし、法律を変えた——
#Me Too #With You につながる100年前の運動」 折井美耶子
トーク

◎らいてうの家族／新婦人協会時代 奥村直史 平塚らいてう孫
◎賀川ハルのキャリア形成とリカレント

富澤康子 賀川ハル研究会・賀川ハル孫
◎奥むめお 常に女性の暮らしの困難さに寄りそう運動家
河村真紀子 主婦連合会・奥むめお孫

◎市川房枝が遺したもの、受け継ぐもの
久保公子 市川房枝記念会理事長・元市川房枝参議院議員秘書

ご挨拶

上田真田平塚らいてうの会 会長 沓掛美知子



長年に亘り会長をされた花岡静枝さん、杉山洋子さんに代わって、会長をすることになりました沓掛美知子です。微力ではございますが、精一杯やらせていただきます。今年度から上田、真田らいてうの会は、一つになりました。

花岡さん、杉山さんは、この平塚らいてうの会発足当初からご尽力頂き、家の建築、記念事業、らいてうの森の整備等数々の活動を精力的にされ、今の歴史を造られました。ご苦勞は如何ばかりかと思えます。そんな後を引き継ぐ事は、私にとっては大役ではありますが、皆さんのお力を頂いて何とかやっていこうと思います。お二人には顧問として助言を頂き、新しい役員八名で会の発展に努めて参ります。また、理事として、会にご尽力頂いた藤原美津子さん、富松裕子さんお二人もまだまだ貢献して頂けるとの心強いお言葉を頂いております。どうぞ宜しくお願い致します。

学びと交流の20年

元真田らいてうの会 花岡静枝

2000年の春まだ浅い3月30日 小林登美枝先生、折井先生、小林明子さんをお招きして「平塚らいてうを語る」の講演会を開催。その後、四阿山高原の建設予定地をご案内しました。雑木林

にチラチラ降る春の雪に富美枝先生は「何と美しい。らいてうの魂が舞い降りるわ」とおっしゃったのを思い出します。

それから20年、「我が町にらいてうさんの家、建設を」という熱い気持ちで会員の方々と一緒に真田中の一軒一軒にご寄付をお願いしました。

開館してからの、全国からの来館者との交流やらいてう講座は沢山の学びの場になりました。戦中に怖い経験を致し、平和の尊さ、命の大切さが身にしみている私は、「女性の活動は平和運動につくる」との思いを強くしました。

こども祭りのイベントでは紙芝居、合唱、蕪餅作りなどを開催しました。並べた案山子を来館者が辿っていくとらいてうの家に着くというしかけをして楽しんでいただいたこともあります。



らいてうの家の周りは自然がいっぱい。山野草、鳥のさえずり、季節が参りますと吾亦紅が咲きます。

らいてうがおりたつ庭吾亦紅

地元「平塚らいてうの会」の発展を!!

元上田らいてうの会 杉山洋子

「あずまや高原にらいてうさんの土地があるから会員有志で見に行きます。そのバスに上田駅から乗ってください。」という折井美耶子さんの電話に誘われて上田駅から参加したのが私と藤原美津子さん。(2000年6月であった)

「らいてうさんのお家を作るのなら上田の人たちにらいてうのことを知っていただかなければ



：」という事で急遽作った「上田平塚らいてうの会」。とりあえず「らいてうからのメッセージ」の読書会を始めたところ20人、30人、40人と会員が増えていき、まず建設資金集めから始まった活動も06年5月からは家の維持活動となり、いつの間にか20年。家も築後15周年を迎えた。ここで富松さん、藤原さん、花岡さん、杉山の4人が退任し、新しく「上田真田平塚らいてうの会」として再出発。これからも女性の学習と憩いの場として発展されることを願います。

朝ドラ「エール」にらいてうの名が

4月7日放映の「エール」を見ていたらヒロイン音の父が「元始女性は太陽であったか。うちの太陽はやかましいのう」と言い、手にしていた新聞がアップになりました。「元始女性は太陽であった」の平塚らいてうは語る 法改正成立は一つのきっかけに過ぎない」

大正のこの頃「平塚らいてう」の影響力は大きくお父さんもよく知っている人物で、治安警察法改正も新聞に掲載されるほど注目されていたのだと思います。昨年、新婦人協会発足100年の記念イベントを開いたこともあり、らいてうを取り上げてくれたNHKへ感謝の手紙を送りました。

この新聞が読みたたく、NHKに問い合わせましたら、「実際の新聞ではなくドラマのために

博史が訪ねた頃の四阿高原（牧場）



昭和30年代後半の北信牧場（『菅平高原誌』より）

1883年（明治16年）菅平の官有原野を借りて牛を放牧したのが牧場の始まりです。それまで上高井郡豊丘村の乳山牧場（破風高原）が中心だったのですが、規模拡大のためと、この地が暖斜地で幼年期の谷は牛の水呑み場として好適地であったからです。1899年（明治32年）北信育牛馬組合と改称し、およそ1595haの面積と1700頭の牛を有していました。牛の放牧は明治中期から大正初期が全盛期でその後放牧頭数は大幅に減少します。

この写真の頃1955年には牛は900頭くらいです。奥村博史もこの頃訪れていたことでしょう。この風景を見ながららいてうに7通のハガキを送っています。ハガキには「高原の美しさ清々しさを満喫」「（花の）色が素晴らしく、上がってくる時にウグイスがしきりに鳴いていた」と記述されています。うぐいすの鳴く季節だと足許にはアズマギク・フデリンドウ・オキナグサ・スズランなど咲き出しているのではないのでしょうか。それ

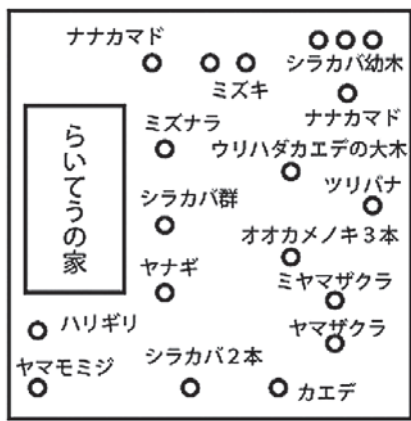
らを愛でながら広々とした高原に佇んで手をいっぱい広げて開放感に浸っている博史の姿が目につかびます。時を同じくして1957年四阿高原を所有する東京のホテル経営者が無償で土地を解放し、国籍や宗教を問わず様々な人々が集まる平和村を作ろうと新聞に報じられます。らいてうもこの構想に共鳴し、自然の中に身を置きたい気持ちとあいまって、この地に小さな家を建てたいという思いに至ったのかもしれない。

「家」にある木 どんな木？

家の南側を中心に赤松以外の木を5月17日に調べました。この図は正確な位置ではありません。こんな木があるのだとわかるためのものです。特徴的だったのはウリハダカエデの大きな木があったことです。又、笹を刈ったところにはシラカバ

が真っ先に出てきていたことです。今回伐採した赤松の年輪を見ると60年以上経っています。丁度らいてうがこの土地を購入した頃には、この木は小さな幼木としてあったということです。そのことから、ここがまだ牧場の裾野の草原で赤松の幼木がちらほらあった風景だということが想像できます。

（倉橋純子）



作ったものです」とのこと。そして、「ヒロイン音が太陽のように周囲を明るく元気づけていく役であることを分かりやすく伝えるために『元始女性は太陽であった』の言葉を引用」「らいてうのこの言葉が出てから10年以上経過している時期なので、唐突で不自然に見えないように新聞掲載を読む演出にした」「当時の話題としてありそうな治安警察法改正を用いて記事にした」そうです。

いろいろ考えて小道具としての新聞を作ってくださったことに感激しました。「法改正は一つのきっかけに過ぎない」——らいてうさんが語りそうな言葉です。今も女性の立場は弱い。ジエンダーギャップ指数の低い日本です。今の私たちへの「エール」だと思いました。

一方、この新聞が1923（大正12）年9月27日発行を想定していることに違和感を覚ええました。この年9月1日に関東大震災が起きています。音が住んでいた名古屋圏であっても、その月の27日にこの内容の記事を掲載するのでしょうか。この頃の新聞は大震災一色ではないでしょうか。

らいてうは、女性救護活動としてはもともと早く9月24日に中條百合子ら9人で災害救済婦人団を結成し、活動を始めています。らいてうが語るならば災害救済婦人団のことでしょう。

歴史的蓋然性を正確に伝えるドラマづくりは難しいことだと思いつつ、太陽かららいてう、治安警察法改正へとつながってくださったNHKの方々に感謝いたします。

（金輪きみ子）

シリーズ(新婦人協会の人びと) No.5



田中 芳子

田中 芳子は、
一九二〇年一月六日
新婦人協会最初の会
合に出席している。

芳子が協会に入会した動機は、一九年二月小学校の教科書についての講演会を聞きにいったところ、警官から「婦人は」と追い出されてしまった。「子どもの教科書のことも母親が話を聞くこととできない」とその不当さに憤慨した。当時この文部省主催の講演会は、政談演説として取り扱われており、親でも女性が入場できなかった。そんなとき、らいてうからの入会の誘いを受けて早速入ったと、のちに芳子は語っている。

芳子は田中林太郎・峰千代の三人姉妹の長女として生まれた。「からくり儀右衛門」として知られる田中久重は、芳子の曾祖父に当たるといふ。芳子五歳のとき、藤山不二は田中家の養子となり、長じてのち二人は結婚、四男一女を儲けた。

不二は一高、東大と進学し、のち三年間ヨーロッパに留学した。留学期間はちょうどイギリスで婦人参政権運動が盛んだったところで、女性たちの活動を目の当たりにして帰国。「もつと婦人がしっかり発言しなければ」と芳子を励まし援助した。芳子は、協会のなかでも目立たない会計や会計

監査を引き受けて活躍した。「婦人には未だに独立した財産権が殆どないのでから婦人運動の永続が中々むづかしいのです」と述べ、民法上女性には財産権がないことが、人間関係をときには難しくし、運動の継続を困難にしていると冷静に分析している。

協会解散後は、婦人参政権獲得期成同盟会創立によって中央委員として財務部を担当し、婦選獲得同盟では、第六回まで中央委員を務めている。関東大震災に際して成立した東京連合婦人会でも活躍し、母性保護法制定促進婦人同盟では副委員長となっている。また一九四〇年から五五年までは、家庭裁判所調停委員も務めている。

その間、夫不二から「子ども四人を一生懸命育てたなら、本の一冊位は書けるでしょう」と勧められた。躊躇していたが「そんな事では婦人問題の前途もまことに心細い」などと励まされ本の準備に取りかかったところ、関東大震災にあい原稿の一部などが燃えてしまったという。しかし二二年病弱だった夫不二が早世したのち奮起して二五年に出版した本が『親こゝろ子こゝろ』である。この本は、母親や主婦向けに書かれたもので、女性にとつての自立と母親の子育ての権利を謳った本として当時の女性に大きな影響を与えた。

一九六一年一月、婦選会館地鎮祭後の婦選同窓会の席で、「先頃：田中芳子さんが会館の寄附を届けられ、建設予定地に十分余りも立ちつくして帰られ」というエピソードが披露された。その直後の一九六一年二月八日、芳子は八一歳で永眠した。

(折井美耶子)

【事務局日誌】

5月13日 2019年度会計監査を受ける

5月14日 第7回理事会

5月30日 新型コロナウイルス感染症の影響で中止

第21回通常総会（於新婦人中央本部会議室）

第1回理事会

6月26日 会ニュース第110号発送

◎新型コロナウイルス感染防止のため、らいてうの家は4月～6月休館していましたが、今回の「家通信」は休刊です。

◎2020年度の会費、ご寄付などの
ご送金をお願いいたします。

◎小森陽一さん同行信州の旅 9月26日～28日

26日 松本猛さんと対談（ちひろ美術館）

27日 小森陽一講演会
（上田市中央公

民館）

28日 らいてうの家

窪島誠一郎さん
と対談（無言館）

実施内容について等の
問い合わせ・申し込み
は「たびせん・つな
ぐ」へ

03・5577・6300



台風などに備えて家の周りの
木々を伐採しました。

平塚らいてうの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

地域に支えられる「らいてうの家」

―来年「没後50年」に希望を語ろう―

会長 米田佐代子

「新型コロナウイルス」の危機は、まだ終息の気配がありません。らいてうの家も4月オープンを延期して7月に開館しましたが、毎週交代で詰めていた首都圏からの要員も自粛せざるを得ず、「ほっとする」と喜ばれていたお茶のサービスも、らいてう講座や森のめぐみ講座などのイベントも中止が続いています。

隣接ホテルもコロナ禍が引き金になって「廃業」してしまい、いつもはにぎわう季節に人も車も少なくなつて、クマの気配や白昼道路をカモシカが歩く姿が見られるほどでした。東京都内の役員会も、上田からはリモート参加しています。

地元の奮闘と上田市からの支援のご厚意

このような状況で「家」への来館者は例年の2割に満たず、団体の申し込みもごくわずかですが、それでも訪問してくださる方が絶えず、東京から移住したという方やあずまや高原に夏季施設を持つ学園の先生などもみえて「オープンしてよかった」と思える3カ月でした。



事業者の看板は撤去されたが、らいてうの家の前に立ち続ける太陽光発電施設建設反対の看板

特筆したいのは、らいてうの家運営にあたる地元の方がたの奮闘と、上田市からの支援です。首都圏の役員が現地に行けないなかで、この春「上田真田らいてうの会」として新発足した地元会員のみなさんが、受付から展示案内やグッズ販売などを一手に引き受け、来館者を喜ばせています。また上田市は、4月から6月まで休館したらいてうの家を、「上田市文化芸術施設活動継続事業支援金」の支給対象にしてくださいました（4面参照）。収入激減に苦慮していた私たちにとつてほんとうにありがたく、心から感謝するしだいです。

自然とともに平和世界の展望を

らいてうは、信州出身ではありませんが、若き日に松本市郊外に滞在、人間が自然とともに生きることこそ「人間本来の純粋相」だと気がつき、そこから生まれた平和への思いを生涯貫きました。それは、現代世界を覆う分断や対立、人種差別や性暴力、武力紛争や核戦争の危機などを乗り越える連帯と協同の平和世界への展望につながります。

らいてうの家は10月末で冬季休館しますが、らいてうと信州の縁を大切に、来年の「没後50年」を「希望の年」として記念のイベントに取り組みたいと思います。

太陽光発電設置看板は撤去されたが

あずまや高原の自然を壊す太陽光発電設置問題は、事業者からの応答がないままこの7月、突然告知看板（2016年設置）が撤去されました。しかし事業者に問いあわせても一切説明がなく、計画を撤回したのかどうかさえ返答を拒否しています。廃業したホテルも今後どうするのか、予定は不明です。

らいてうの家に立てた「反対」の看板は明確な撤回の意思表示があるまでは撤去しないことにします。ここを上田市民、長野県民、そして全国の方々に愛される「平和・協同・自然のひろば」として育てる仕事はこれからも続けましょう。

「コロナ」に負けず、どうかお力添えくださいますことを。

新型コロナウイルス対策に

ジェンダーの視点を

「コロナ」と女性の運動」

新型コロナウイルス感染症の世界的大流行が本
当に大変なことなのだ実感したのは、毎年必ず
開催する国際女性デーの集会を中止したときでし
た。3月8日東京の中央大会をはじめ、草の根の
集まりにまで影響は及びました。

女性運動、女性分野の立ち上がりは早かったと
思います。

国連は「北京+25」のイベントを3月ニューヨ
ークで予定していましたが、女性の地位委員会初
日の宣言採択にとどめ、NGOの参加もなしでし
た。しかし、その後「国連ウイメン」（国連の4



婦団連のアピール行動「コロナ対策を最優先に一憲法を
生かし、いのち・くらしを守ろう」
(安倍首相退陣表明の8月28日、新宿駅頭)

つの女性機関を統合、2011年発足）は矢継ぎ
早に提言を発表、各国政府に「コロナ対策にジェ
ンダーの視点を」と求めました。「国連ウイメン
の仕事は各国政府が女性や少女の権利を守るよ
う支援すること」とし「ジェンダー視点のない決
定や政策は大抵失敗する」と言い切っています。
グテレス事務総長は全世界での即時停戦の呼びか
けに続き、「女性や少女には家庭内に脅威があ
る」として「DVからの保護」を求めました。
G7ジェンダー平等委員会も4月、女性の権利
の悪化を防ぐための緊急対応をG7各国政府に提
言しました。

コロナ後の世界につながる動き

日本でも、日本女医会が4月に「全ての医療従
事者、女性、社会的弱者が様々な被害から守られ
るよう」10項目を要請。5月には浅倉むつ子さん
ら女性有識者が、ジェンダー視点で全対策を見直
すことを要請。国際婦人年連絡会、婦団連、新婦
人等の団体も次々と要請をしました。

ジェンダーの視点に立ったコロナ対策とは、ス
テイホームで増加する家事・育児の負担、エッセ
ンシャルワークと言われるケア労働などの多くは
女性が担い、健康不安を伴う重労働でリモートワ
ークは不可能、しかも低賃金、非正規雇用で身分
不安定・貧困化、DVや望まぬ妊娠の増加・等
々の問題への対応です。

重要なのは、こうした問題がコロナによって起
こったのではなく、以前から存在していたものが
「見えてきた」のだということです。特別給付金

『紀要』第13号刊行

昨年11月に開催した「新婦人協会100年のつど
い—女性たちが社会を動かし、法律を変えた #Me
Too #With You につながる100年前の運動」の記録
を掲載しました。

折井美耶子副会長の「基調報告」、らいてう・
市川房枝・奥むめお・賀川ハルゆかりの奥村直史
さん・久保公子さん・河村真紀子さん・富澤康子
さんによるトークです。

論考は米田佐代子会長による「『コロナの時代』
を生きる人間の力—2021年平塚らいてう没後50年
を前に考える」です。
(飯村しのぶ)

受給者を「世帯主」としたために、最も必要な
に支援が届かないという批判が噴出しました。今
年は男女共同参画基本計画の改訂年でもあり、世
帯主規定をなくせという声が高まっています。

コロナ後の世界につながる動きの中で歓迎でき
るのは、こういう「見えてきた」問題の解決によ
り期待される、よりよい社会の内容の一つとし
て、女性リーダー（ドイツ、ニュージーランドの
首相など）の評価とその増加を求める声です。

また、人との直接交流の意義が再確認される一
方で、オンラインによる新しい情報交換の探求が
始まっています。「女性はITに弱い」という決
めつけを打破し、女性たちは果敢にオンライン情
報交換に挑戦し、若い仲間を増やしたり遠方の仲
間とつながったりしています。
(堀江ゆり)

スペイン風邪とらいてう 〜新婦人協会の活動のさ中に〜

第一次世界大戦の終結の一因でもあったスペイン風邪は、戦後世界に大きな脅威をもたらしました。大戦後の平和と改革のうねりの中で、らいてうが起こした新婦人協会の活動も、そうした感染症の流行の中で進められました。

日本でのスペイン風邪の死者は50万人、感染率43%と甚大な被害をもたらし、その流行には3つの山がありました。第1の最大の山は1918年11月で、この時は、らいてうは無事でしたが、新婦人協会の計画を発表して2カ月後、第2の2番目の大きな山の1920年1月には一家で感染しました。らいてう、夫博史、長女曙生4歳、長男敦史2歳の一家4人と市川房枝の教え子で家事手伝いのよねさんが罹り、らいてう一家は回復しましたが、よねさんは残念なことに亡くなってしまったのです。

それから1年2カ月後の第3の流行の山は、1921年3月で第1、第2の山と比べると小さいものでした。しかし、らいてうは、この3月に発熱して寝込みました。『女性同盟』4月号には、「今月は、まる一月子供二人の麻疹の看護と自分の病気とで澤山の仕事を控（ママ）えながら、何一つ出来ずに終わったことを申し訳なく思います。（後略）」という「ご挨拶」が載っています。この時のらいてうの発熱は、自覚されていま



治警法5条改正案の説明者田淵豊吉議員と打ち合わせるらいてう（右）と市川（中央）
（『東京朝日新聞』大正9年7月20日号より）

せんがスペイン風邪だったのではないでしょう。そうだとすれば、らいてうはスペイン風邪に2回罹ったことになります。

第1回の感染時には元気に回復し、7月には動きやすいよう当時としては珍しかった洋装になって活動しました。市川房枝によれば「この一年半、あまりに忙しすぎた。自分の健康にまかせて二倍三倍の仕事をしたと思うが、さすがに疲れた。平塚氏は私がびっくりするほど積極的によく働き、嫌な議員や議会訪問も一緒にやった。あるいは私がひっぱりまわしたのではなかったかと思うが、いやなことを我慢してする人ではない。しかし、九年（1920年）の終わりがくからは、同氏も疲れたのか前ほどには動かなくなつた」と記しています。こうした活動による疲労の積み重ねが、第3の流行の山は小さかったのにもかかわらず発病につながったのではないのでしょうか。

その後、らいてうは健康を回復できず、自家中毒症状の悪化によって、市川房枝が7月に渡米し

た後、夏には千葉に転地療養のため転居して運動の中心から去ることを余儀なくされたのでした。しかし、らいてうと房枝の渾身の力を注いだ活動は会員たちに引き継がれ、治安警察法第5条の改正に成功して戦前の女性の政治活動への参加の道を開きました。今、コロナ感染症の中、「らいてうの家」は、2カ月遅れて開館し、PCR検査の拡充が進まない状況下、知恵を絞って運営が続いています。スペイン風邪の中、活動したらいてうの姿は、活動を持続する私たちの背中を大きく押してくれています。

（三留弥生）

NHK「知恵泉」に 平塚らいてうが登場！

歴史上の人物の様々な「知恵」を紹介するNHK・Eテレ「先人たちの底力 知恵泉」に平塚らいてうが登場しました（9月22日午後10時）。

米田佐代子会長がインタビュー取材を受け、塩原事件から『青鞥』発刊に至るまでのらいてうの「わたしはわたし」の思いと、母親になって「母性の権利」にめざめ、「母性保護論争」から新婦人協会に至るらいてうの主張が現代の女性の生き方に通じるのではないかと話しました。

放映では、仕事と家庭の両立、女性の新しい生き方を求めて奔走したらいてうの姿が描かれていました。



シリーズ(新婦人協会の人びと) No.6



高安やす子

高安やす子は、
1991年11月24日
大阪で開催された第
1回婦人会関西連合
大会で、らいてうが新婦人協会設立の報告をした
とき、大会の発起人の一人として参加していた。

やす子は1883年清野勇、蓮の二女として岡
山で生まれたが、小学校1年の時父が大阪高等医
学校(現阪大医学部)の校長として赴任したと
き、大阪に転居した。堂島(のちの大手前)女学
校卒業後、18歳で高安病院の後継者道成と結婚、
やがて芦屋に住み6人の子女を育て、姑も含む大
家族の主婦としての役目も良く果たした。

1920年支部設立を目的として、らいてうが
大阪に赴いたおりの最初の集会にはやす子は欠席
していたが、翌21年2月の「覚醒婦人大会」には
出席し、終了後の支部会でやす子は原田皐月など
とともに幹事に就任し、月1回開かれる「茶話
会」の担当者として活動を開始した。『女性同
盟』8号には9首、11号には17首のやす子の短歌
が載っている。この年12月に支部主催で行った
「恋愛問題批判講演会」は大成功で、収益金
200円余を本部に収めたが、やす子を中心とな
っての活躍で、地方紙などでも報じられている。

しかしその後22年1月にはやす子は協会から退会
している。

一方やす子は愛国婦人会の会員でもあり、全国
各支部の主事が集まる「愛国婦人会改革協議会」
で、「現在主事の大部分が男子であるが漸次婦人
に改めたい」と提案するなど、臆することなく主
張している。第一次大戦後のこの時代、愛国婦人
会の活動は軍事援護から社会事業に主力を移して
おり、大阪では独自に児童衛生、婦人衛生の普及
など、社会福祉的な活動を行っていた。医師の妻
としての目線も感じられる。

大阪道修町の私立総合病院である高安病院の院
長夫人という社会的地位、そして、美貌のやす子
は「東の九条武子、西の高安やす子」と称えられ
て、婦人雑誌や新聞などにもたびたび登場するな
ど華やかな存在でもあった。

またやす子は多趣味・多芸で、女流洋画家団体
「朱葉会」に参加し展覧会にも絵を出品したり、
短歌の勉強会「紫弦社」にも入っており、音楽愛
好家のつどい「清楽会」を結成するなど芸術面で
の幅広い活動をしていた。夫は温厚で音楽や文学
にも造詣が深く、やす子の活躍を理解し、応援し
ていたようである。1925年ころには、婦人団
体、朱葉会、清楽会などから引退し、短歌一筋と
なった。斎藤茂吉に師事し、1941年には歌集
『樹下』を上梓した。

最後に『女性同盟』から2首。
地下室の 重き静けさ 我が深き 孤独の性に
向かうが如し

血のめぐる わが手みつめて 座してあり 草
場の春の 外光の中に

1969年2月12日、85歳で永眠した。

(折井美耶子)

【事務局日誌】

6月28日(30日) りいてうの家オープン準備

7月4日 りいてうの家オープン

7月9日 第2回理事会

8月10日 『紀要第13号』発行

8月12日 第1回常任理事会

上田からリモート参加

9月10日 第3回理事会・上田からリモート参加

9月22日 NHK・Eテレ「知恵泉」で「平塚ら

いてう」放映

上田市から支援金が支給されました

「上田市文化芸術施設活動継続事業支援金」が
らいてうの家に支給されました。

これは、新型コロナウイルス感染拡大により
休業要請に協力した文化芸術施設の活動継続を
支援する上田市独自の制度です。らいてうの家
に市から申請用紙が届き、「上田市は文化芸術
に理解がある!」と感動しました。これからも
らいてうの家の運営に、より一層力を注いでい
こうという思いを強くしました。(金輪)



2017年6月17日 ニューヨーク「核兵器を禁止する女性行進」(しんぶん赤旗提供)

た核兵器禁止条約が昨年批准50カ国に達し、今年発効するのその一つです。アメリカやロシア・中国など核保有大国は反対し、日本政府も唯一の戦争被爆国でありながら署名さえ拒んでいます。が、この条約を実

2021年を迎え、新年のご挨拶を申し上げます。未曾有の「コロナ危機」で、昨年はらいてうの会も思うように活動できませんでした。女性や子どもたちの生活も直撃され、若い女性の自死や、性暴力の犠牲になる少女たちのニュースを聞くたびに、心揺さぶられる思いです。けれどもまた昨年は、未来を語るにふさわしい年でもありました。2017年に国連で採択され

女たちは「空を翔ぶ鳥のように」
——らいてう没後50年を迎えて
会長 米田佐代子

おぼろけの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

現したのは世界の世論と運動です。わけても日本の被爆者運動やICANをはじめとする国際的な運動の中で、女性たちが大きな役割を果たしたことは、特筆されるでしょう。

女性の文化としての平和

今年は「青鞥」創刊110周年」とともに「平塚らいてう没後50年」です。らいてうは、1919年に新婦人協会の運動を起こしたときから「国家が武力で他国を威圧することが戦争の原因」として「一国の国民ではなく世界民になろう」と呼びかけました。第一次世界大戦当時、エレン・ケイも「女は戦場で滅ぼされるために子を産むのではない」と戦争に反対しますが、母となつたらいてうは彼女の「母性主義」に共鳴、「女性の文化としての平和」という考えにたどり着きます。それは「女は子育て」といった性役割的発想ではなく、「いのちを産む性」である女性が立ち上がって、いのちを守る平和社会をつくろうという「社会改造」の主張でした。100年後の今を生きるわたしたちが引き継ぐべき課題ではないでしょうか。

「女性の権利」も「平和」も人権

1995年第4回世界女性会議で出された「北

京宣言」には、「女性の権利は人権」と明記されています。2010年、らいてうの会も参加した「NPT再検討会議要請行動」では世界の女性が集まり、女性が差別されないことはもちろん、「子どもに食べ物と学校があること、ホームレスに家があること、病人に病院があること」が「平和」だと発言、「平和は人権」と訴えました。今、内戦や紛争が続く地域を含め、多くの人びとがこうした「平和」を脅かされています。今の日本は「戦争する国」になろうとしているばかりか、人間らしく生きる権利が奪われているという意味でも「平和」ではないのです。

前を向いて歩いて行こう

昨年のNGO日本女性大会の基調講演で、元国連女性差別撤廃委員会委員長の林陽子さんは、「これからの女性運動は、女性という名前がつく運動だけではなく、その枠を超えてより多くの人びととつながる必要がある」と提起、女性の運動は「空を翔ぶ鳥のように」高いところから広く全体を見渡す視野を持つ必要があると語られました。

かつてらいてうは、雷鳥に化身して「太陽の周りを三度廻った」という幻想を抱きましたが、それは女性が危機に満ちた世界をつくり変える可能性への予言だったのかもしれませんが。

没後50年の今年、らいてうの会は高い空へ飛翔する精神で時代に挑みたいと、記念行事を計画中です。今年も後ろを振り向かず、らいてうがそうしたように前に向かって歩いて行きましょう。

講演要旨

「新婦人協会とらいてう」

—「社会改造に対する婦人の使命」を中心に—

小森陽一

ツアー2日目、らいてうの家を訪れた後小森陽一氏の講演会が行われ、ツアー参加者36名と地元10名の計46名が参加しました。

『平塚らいてう評論集』の中の「社会改造に対する婦人の使命」「母性保護の主張は依頼主義か」「母性保護問題について再び与謝野晶子氏に寄す」「現代家庭婦人の悩み」の四つの評論と新婦人協会創立「趣旨書」をとりあげて、朗読しながら読み解いて行くという形の講演でした。

自己改造から社会改造へ



講演する小森陽一氏
(9月27日 上山田ホテル)

「社会改造に対する婦人の使命」「女性同盟」創刊の辞にかえて」の出だしは「元始女性は太陽であった」という『青鞥』創刊号の一文は「到底精読できないほど思想においても、文章においても粗雑な、不徹底な、そして稚氣に満ちた

もの」だったという自己反省から始まっています。しかし、その情熱、重要性は、10年後の今も変わっていないと述べて、『青鞥』では、女性が文学の力によって内なる真の自己を発見していくという自己改造運動を呼びかけましたが、社会を変えるためにどう行動していくかという運動としての新婦人協会を提起したのです。

趣旨書には市民運動のモデルがある

1917年、18年の頃は、シベリア出兵のための徴兵や、ヨーロッパ並みに工業生産が高まったことにより、都市で婦人が女工として働くようになりました。適齢期になったら結婚して、お国のために子供を生むという女性の生き方が、農村部でも、都市部でも大きく変わっていきます。そういう状況の中で、母性保護論争がおきました。

らいてうは、与謝野晶子に対して「女子の経済的自立は母性が保護され、子供を生みかつ育てるということが公的事業」にならなければ達成できない。与謝野晶子ほどの能力をもってしても、そのところがわからないのかと主張します。

母性保護論争を経て、らいてうは、生活現場で考えるだけではなく状況を認識する力こそ婦人に必要と考えて新婦人協会趣旨書で、「大学程度の常設婦人講習会」をはじめとする具体的な運動を提起しました。どれも現在の市民運動のモデルと

言えるものと小森氏は指摘しました。

新婦人協会は機関雑誌『女性同盟』を発刊し、講演会を開催しましたが、小森氏が事務局長を務める九条の会でも、2004年の発足時から週刊のニュース発行、全国での講演会を続け、地方に運動を広げています。

ジェンダー平等の考えを持っていたらいてう

欧米の婦人運動が「個人主義とデモクラシー」にその源を発し、そこに理論的根拠をおく限り、個人の権利や個人の自由の主張にのみ急で、それがため女性としての特有の権利や義務を久しく見落としていた」とらいてうは述べた上で、明らかに子どもを生む能力を含めて、自然的な性差はある、その性差を含んだ形で社会的な役割のない差別をなくしていくのが課題だと主張しています。ここ30年で広まったジェンダー平等の考えを100年前にすでに持っていたと言えます。第一次世界大戦後、国際連盟が戦争をやめようと動き出していた時、らいてうは、女性の権利を確立すること、母性を社会的に保護していくことを社会運動としてやっていくという見通しをたてて新婦人協会を設立したと考えられます。新婦人協会運動の構想は、これから私たちが何をどう考えていくかという道しるべになっていると改めて思ったと小森氏は講演を結びました。(北澤有希子)

＊
ちびっ子・ふんふん・無言館

＊
安曇野・上山田 3日間ツアー

＊
小森陽一氏同行の旅

ツアー参加者の感想より

「安曇野・上田 3日間」ツアーの2日目は、昼食までゆつくりらいてうの家で過ごし、午後は講演会―たくさんの感想が寄せられました。

小森陽一氏の講演を聞いて

・新婦人協会設立。なぜ作ったのか分かりやすい解説だった。100年前にこんなことをきちつと考えていたのに感心した。すごい人だと思う。

また、第一次世界大戦によって、男たちが作ってきた戦争への行きづまり、男社会の行きづまりに女性が命を張ってたてなおさなければいけない。女性の人権を確立することの必要性から女性運動への道がひらけてきた歴史がよく分かった。

ドイツ30年戦争についての解説、17世紀以降19世紀第一次世界大戦と世界的展望の話は日本でのらいてうの運動についての理解を深めることができた。

・らいてうたちの運動が『青鞥』から発展し、新婦人協会を設立させ、さらに発展させていく中身を詳しくお話しいただき、大変興味深かったです。

・方法論が九条の会の運動からみても、正しかったというお話に100年前の女性たちの「すごさ」に驚きました。

・新婦人協会の方針を詳しく聞けて良かった。
・母性保護をめぐるの与謝野晶子との対立の話は面白かった。

・女性運動の話を「男性」の小森先生がしても違和感がなかった。ジェンダー思想を持っていらっしやるからかな、自然体で聞けました。

・すばらしい講演でした。新婦人協会のことを、昨年少し勉強していたけど、さらに広がりをもって理解できたような気がします。

・らいてうの評論集の朗読が素晴しかったです。女性の権利を論理的に説いた言葉が胸に迫ってくるようでした。評論集を実際に手にとって自分でも読み取ってみたいと思いました。

らいてうの家を訪れて

・素晴らしいのひとこと！設立ですが、維持管理と継続の大変さがとても気になります。土地の方の中にとけこんでいるのもOK！

・先輩たちから話を聞き、どのようなところなのか一度行ってみたいと思いました。とても、



7月の開館から3カ月間、地元会員だけで家当番を受け持ってきました。この日かけつけた地元会員6人の紹介をしました。

素敵な施設でらいてうの活動の精神を学び伝える拠点にふさわしいところと思いました。その維持、運営にご尽力されている方々の努力は、大変なものがあることを知りました。

・らいてうの家を訪れる時は観光気分ではなくきちんと学習する場として使う気分でないといけないと思いました。

・木の温もりのある家が素敵でした。大掃除の時にミツロウを塗ると伺いました。手入れも大変ですね。それにも増して、週3回の開館をお当番で運営できているという組織の力もすごいと思います。

・素晴らしい旅でした。たびせんさん、らいてうの会さんありがとう！天気良かったのがラッキーでした。おいしいお弁当を青空のもと樹々に囲まれた庭の手作りのベンチでいただけとても豊かな時間でした。

・木の温もりをたっぷり感じることができました。らいてうの展示が見やすくてよかったです。

・遠くてびっくりしたが、なぜ、この場所にらいてうの家ができたのか解説を読んで納得した。これから、らいてうのことをもっと学ぼうと本を買った。

・何度も訪れています。自然に囲まれ木のぬくもりが伝わる部屋は、私達を優しい気持ちにさせてくれます。女性設計者たちによる行き届いた計画があったことも教わりました。今回は短い滞在でしたが気持ちのよい木々の緑と爽やかな風に吹かれる事ができました。

次回はゆつくり過ごしたいと思いました。

母性保護論争と私たちの今

NHK・Eテレ「先人たちの底力 知恵泉」

「新しい女の生き方 明治・大正編 婦人運動のパイオニア 平塚らいてう」母になっても働きたい（9月22日放映）は、平塚らいてうの実像を広く伝える大変有意義な番組でした。一人の人間として、女性としての葛藤を通して成長していく姿が丁寧に描かれていました。従来はスキヤンダラスな取り上げ方をされてきた塩原事件を、青春の自分探しの行動として伝えるなどらいてうの内に迫りながら、母性保護論争に至るらいてうの全体像をわかりやすく伝えていました。

番組の中で取り上げられた母性保護論争では、平塚らいてう、与謝野晶子、山川菊栄の3人が取り上げられましたが、それぞれの主張は、平塚らいてう——国が保護、与謝野晶子——経済的自立、山川菊栄——家事に対価と紹介されました。らいてうの主張する社会的保障、晶子の主張する仕事を持ち経済的に自立する必要は、対立するものではなく、両者が共に必要であり、現在も未解決の課題だということは出演者にも共有されていました。

山川菊栄の主張

ただここで、山川菊栄の「家事に対価」という主張は、この論争の中で山川菊栄の主張の要点だったのでしょうか？商品として評価されない家内労働に価値を認め、対価が支払われるべきということは、現在の課題でもあります。この時点で

の山川の主張の要点はそこではなく、らいてう、晶子への批判者として「私は旧来の女権運動（晶子）と新興の母権運動（らいてう）との何れにも価値を認め、その功績を承認するものである。」としながら「現在の経済関係といふ災いの大本に斧鉞を下そうとしないで、その存続の成果として現はれたる諸現象に対するに、経済的独立とか、母性保護とかいふような不徹底な弥縫策を以てしようとする所が、両者に共通の誤謬である。」（『婦人公論』1918年9月）としています。

時代との共振関係

論争当時1918年、7月には米騒動が始まり、9月には初の本格的政党内閣として原敬内閣が誕生、世界では、第一次世界大戦が終わりロシアでは革命によりソヴィエト政権が誕生しています。そうした激動の世界と日本社会の動きの中にこの論争が交わされたことを考えるとき、山川菊栄の主張の要点は、「社会の土台を変革せよ」というところにあつたのではないのでしょうか。当時の、社会主義者への弾圧と検閲制度の下でその表現は間接的なものになっていますが。

母性保護論争を今振り返るとき、この3人を突き動かした要因には、それぞれの生活に根差した体験からの切実な思いとともに、社会が新しい価値の創造に向かつているという時代との



敦史に授乳するらいてう（博史の絵）

共振関係があつたのではないのでしょうか。

包括的な差別禁止法を

今、コロナ禍の中で、ジェンダー格差は、非正規労働者、解雇者、自殺者数の多さ、性売買、家庭内暴力など今までも増してはつきりと目に見えるものになっています。その一方で全国に広がったフラワーデモは、日本の性差別社会の変革へのうねりを起こしています。包括的な差別禁止法を作り日本の性差別社会を転換していこうという運動は日本社会の在り方そのものを変えていくのではないのでしょうか。

（三留弥生）

【事務局日誌】

9月26日～28日 らいてうの会共催・小森陽一同 行信州の旅

9月27日 らいてうの家見学 講演会「新婦人協会とらいてう」（於上山田ホテル）

10月8日 紀要編集会議・第2回常任理事会

10月12日 森のめぐみ講座・庭の整備・庭の植物 観察会

10月26日 らいてうの家・展示収納作業

10月27日 らいてうの家・大掃除、反省会 冬季休館

11月12日 第4回理事会（上田オンライン）

11月17日 パネル委員会（上田オンライン）

12月10日 第3回常任理事会（上田オンライン）

12月17日 パネル委員会（上田オンライン）



全国各地で「#わきまえない女」たちの行動が
(2月11日愛媛県で)

そこへ森喜朗オリ・パラ組織委員会会長の「女はわきまえて黙っている」発言です。100年以前上の『青鞥』の時代に逆戻りしたような女性差別発言！しかし、その後の展開は違いました。ネット署名が15万を超えるなど、もう「わきまえない」「黙らない」「許さない」という声の広がりとは同氏を辞任に追い込

森発言に「黙らない」女性たち

昨年5月の総会以来、平塚らいてうの会も「コロナ」の影響を受け続けた1年でした。菅内閣へと政権が替わっても、コロナ禍への無策、国民のいのちとくらしに目もくれないその本質は「アベ政治」と変わりません。

らいてう没後50年・『青鞥』創刊110周年
今、生かそう
そのころざし

らいてうの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

み、時代の変化を実感させました。「民主主義の危機」「黙っているわけにはいかない」とアピールした会の抗議声明には、信濃毎日新聞、長崎新聞など多くの反響がありました。森発言の余波の中で迎えた3・8国際女性デーを多くのメディアが報道し、国際的なジェンダー平等の進展と日本の遅れを指摘したのも、これまでにないことでした。

没後50年記念企画―様々な取り組みを

こうした中で迎える「らいてう没後50年・『青鞥』創刊110周年」。会では「家」オープンの前に、Zoom会議で企画展示パネルの検討を重ね、6枚のパネルが完成間近です。

コロナ禍で規模や形態（対面かオンラインか）は未定ですが、今、らいてうのころざしを生かそうと社会に発信するために、秋には講演会・催しを実施しようと相談中です。

会員の奥村直史氏（らいてうの孫）は、規模は小さくても身近なところでらいてうの映画を観たり話し合ったりする会をもとうと提案、すでに実践され、好評です。ぜひ取り組みましょう。小集会への講師派遣などは事務局にご相談ください。

コロナ禍でも、会と「家」（3面参照）はがんばって活動してきました。2016年に突然起こ

った「家」の前の太陽光発電施設建設問題。事業者からの連絡は途絶えたままですが、「撤回」の意思表示があるまで、会は「反対」を貫きます。

課題は会と「家」の活動の維持・発展

コロナも気候変動も、核戦争の脅威も、国境を越えた世界的な連帯なくして解決しません。そこには女性の力が発揮されねばなりません。今こそらいてうのころざしを生かすときであり、会と「家」の活動の維持・発展が求められます。理事会は、そのための方策の一環として、会の定款を変更し、役員体制を会長制から代表理事制（1名（5名）へと転換することを総会に提案します。実りある総会になることを願っています。

第22回通常総会のご案内

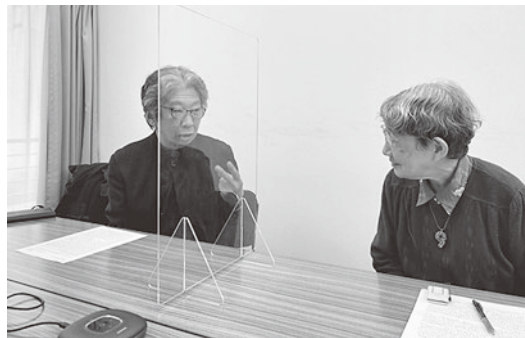
日時 2021年5月22日（土）13時半開会
会場 東京ウイメンズプラザ 視聴覚室
議題 ①20年度事業報告と決算報告
②21年度事業計画（案）と予算（案）
③定款変更について
④新役員選出
⑤その他

らいてうの家オープン 4月24日（土）
森のめぐみ講座 6月6日（日）7日（月）

家の周りの植生を学ぶ・菅平高原で植栽観察
*今年のらいてう忌はコロナウィルス感染症の影響で5月には行いません。

*日程は変更するかもしれません。会のホームページをご覧ください。

オンライン新春トーク



小森陽一さん

米田佐代子さん

「小森陽一・九条の会事務局長が読み解く2021年」(たびせん・つなぐ企画)の第2回で、米田佐代子会長との対談がネットで有料配信されました。その一部を紹介します。

小森 2021年5月はらいてう没後50年。そして、『青鞥』創刊110年という節目の年。米田さんがらいてうさんのことをどう考えていたかをお聞きたいと思っています。

1971年5月、竹早高校の紛争が収束した時、家に帰ると母(詩人の小森香子)が「らいてうさんが死んじゃった」と大泣きしていたんです。その母親から戦後の日本の女性運動にとつてらいてうさんの果たしてきた役割を聞いていました。そして、1972年北大に入り、生協で米田佐代子『近代日本女性史』上下(新日本出版社)をみつけて仲間と読みました。女性史というジャ

ンルがあることを初めて知り、歴史を女性側から見直すとこんなに違うのかと思ったんです。性差のかたまりがあると話し合った。だから米田さんはジェンダー認識開眼の先生なんです。

米田 いや、小森さんこそ夏目漱石はらいてうが気になってしょうがなかったことを教えてくださった先生です。私は2006年にらいてうの家をオープンしてから一時は毎週のように通い、熱中しています。じつは生前会ったことはなく、1971年に亡くなったときも雲の上の人でした。私がらいてうの研究を始めたのはその後です。大学で歴史を専攻して1950年代に卒業論文を書いたときは、らいてうのような「上流階級の女性」ではなく女性労働者の歴史を書こうと、明治19年に山梨県の甲府の製糸工場で工女たちがやったストライキを調べたのです。

小森 そのことはとりあげられていなかった？

米田 いえ、とりあげられていましたが、これは労働者のストライキではなく、工女たちが雇主に感情的に反発しただけだというような意見があった。紡績・製糸工場などの若い娘たちは労働者として未成熟なため、日本の労働運動の成長は遅かったといわれました。井上清さんの『日本女性史』という本は戦後女性史の草分けですが、そこでも重工業で働く男性労働者が労働運動の先頭に立ち、軽工業で働く女性たちはそれについていたと書いてありました。女は男の後についていくだけなのかとコチンときたんです。

小森 井上清のような進歩的な歴史学者でも、労働運動における女性の役割を理解していなかつ

た、それに反発したわけですね。

米田 そこでなんとマルクスの『資本論』やレーニンの『国家と革命』などを初めて読みました。

小森 それは、50年代ですね。その頃は労働運動はかなり厳しく、そこに関わっていた私の父は姿は見せないし、母は子育てに苦労した。労働運動をやっていた人達は、世に出られなかった時代だった。その時にマルクス・レーニンを読み直して、女性労働者について卒論を書いたんですね。

米田 でもレーニンを読んだら、いわゆる「ブルジョア民主主義の要求は労働者にとっても重要だ」と書いてあって、らいてうのような市民的な女性たちの運動が担った歴史的意義を明らかにしようと思ひ、民主主義の問題として女性史に関心を持ったのが、らいてう研究の出発点です。

なごやかに始まった対談は約1時間半。米田さんが保育所運動をしていた頃、母となつたらいとうが新婦人協会運動をした姿に力を得たということなど、自分の生活史とらいてうへの思いを語りました。そして、晩年入院中のらいてうが「平和の一点で女性団体は団結してほしい。市川房枝さんならできると思う」と言い遺したことが女性運動の新しい方向を生んだことも紹介しています。

(文責・北澤有希子)



たびせんにお申し込みの上、オンラインでお聞きください

らいてうの家 昨年の運営から

コロナウイルス感染禍での 学び多い一年でした

らいてうの家は昨年4月25日オープンの予定を6月6日に変更し、例年は地元と東京で行う大掃除も5月2日に地元だけで行いました。オープンまでの期間、閉め切っておくことはできないということ、地元理事が交代で換気を続けました。5月の連休も開館できない中でしたが、花岡さん、杉山さんと上田市へ会長交代の挨拶に行きました。

上田市の審査を受け、助成金獲得

そんな中、嬉しい知らせが上田市役所から届きました。有り難いことに、入館中止に伴う収入無し各施設に助成金を支給するとの知らせでした。早速手続きをして申請しました。

市役所から、らいてうの家の調査に職員お二人が来て、審査をしていただきましたが、助成金が頂けたのは家の管理がしっかりとっていたからでした。

特に、来館者の状況がノートにしっかりと記されていて、例年の5月、6月は何名の来館者であったか記録されていたことが大事なことでした。また、当番日誌がありましたので、そちらも見てくださいと管理されていることに領いておられました。



今年の開館を待つらいてうの家

た。

日頃の管理が実を結んだ結果でした。

地元スタッフだけでの運営

6月までは予定したイベントの中止にがつくりしましたが、開館しないで終わってはいけないということ、7月開館が決定しました。東京と地元の理事で開館のための展示を6月末に行い、7月前半は例年の当番体制で開館しました。ところが、地元の当番の方の不安が強く、地元当番だけの開館に切り替えました。日頃、東京の当番さんにお任せしていた事務処理が大変でした。感染予防対策等は当然のことですが、土、日、月と毎日戸締りから会計報告や日誌報告をして帰らなければならなかったことです。

例年は東京の当番にお任せだったFAX操作が上手くいかず、裏面で送られたり、ついには故障

したという事等もあり、事務局長の金輪さんがPCR検査をして家に向いたこともありました。上田真田の当番会員さん、大変お世話様でした。その結果と言いましようか、もう少し新しいタイプのFAXが欲しいということになり、一地元会員の方が寄付すると申し出て下さいました。有り難いことです。この4月には設置されていることと思います。

また、当番予定者が仕事柄町村外に出る時はその都度接触者等報告書を提出する事になり当番をすることが困難になってしまいました。替りを理事の皆さんが交替して乗り切りました。ご苦勞様でした。

県外からも来館者が！

来館者はこのような時節柄ないと考えていましたが、7月、8月、9月とこんな時期だから来てみましたとか、県外からご夫婦友達など目的を持って来て下さっていたことを思い出します。

ほとんどの方がインターネットで開館を知ったと言っていました。ネット時代を痛感しました。

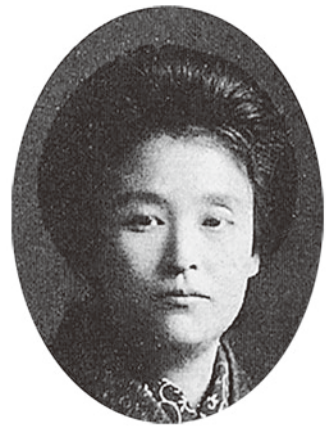
イベントは結局、秋の作業と森のめぐみ講座が行われただけでしたが、実り多い新たな学びの場となりました。

(沓掛美知子)



秋のイベントでは、家の庭の植栽について学びました。その時見つけた朝鮮五味子。赤い色で残念

シリーズ「新婦人協会の人々」No.7



小口みち子

小口みち子は、日本美容界の草分け的存在として知られているが、新婦人協会で活動したことはほとんど知られていないのではなからうか。

みち子は、1883（明治16）年に兵庫県で生まれた。教育者であった父寺本武が30代で亡くなり、母ぬいは苦勞して5人の子どもを育てた。そのため「女でも自活の道を」という信念を持つようになった。小学校を卒業したのち、独学で教員検定試験に合格して小学校教員となった。

郷里で2年、神戸で3年ほど教師をしたのち、1904年上京した。東京でも教師をしながら、雑誌編集の手伝いをしていたが、平民社の社会主義婦人講演会の取材で女性解放思想に共鳴し、堺為子や西川文子らと治安警察法第五条改正運動を行った。一方、相馬御風の文芸誌『白百合』に「美留藻」という雅号で短歌を発表し、歌人としての評価も高かった。

しかし、当時難病といわれていた「脚気」にかかり、やむなく郷里に帰り療養生活を送った。間もなく健康を回復したみち子は、「美顔術」の話聞き、将来性のある仕事と確信しその習得のため、1907年ふたたび上京した。

日本初の美顔術を行う理容館の遠藤波津子に弟子入りして、約8年間にわたり美容全般や経営実務なども学んだ。私生活では、1910年には、美顔術の取材に来て知り合った映画脚本家の小口忠と結婚した。第1子総子は、麻疹にかかり一歳半で亡くなったが、その後第2子静子、第3子達也、第4子正也を儲けた。『よみうり婦人付録』に「共稼する小口みち子」と紹介され「男子と同様一つの仕事を持つて稼ぐのは「むづかしいわざだ」と述べている。

14年には理容館から独立して、芝公園に東京婦人美容法研究会を設立し、美容家の養成を始めた。桃谷順天館の顧問となり「小口みち子女史の美顔講座」という新聞広告や、『主婦之友』、『婦人倶楽部』などの美容相談など多忙な日々が続いた。しかし一方では西川文子らの『真新婦人』や堺利彦の『へちまの花』などにも短歌や小説を発表している。

1920年には新婦人協会に参加している。多忙なため目立った運動はしていないが、「政治法律夏期講習会」に参加し、『女性同盟』のアンケート「貴女は選挙権を如何に行使なさいますか」に「女性の力の加わった真の文明を」と述べている。

関東大震災で芝の家は全焼したが、すぐに美容室を再開、また東京連合婦人会に参加し被災者救援活動を行い、その後の婦選獲得運動にも参加している。また30年の総選挙では無産政党の堺利彦の支持を堂々と表明している。戦中は電力統制のため美容室を閉じ、郷里に疎開した。

1955年、婦人参政10周年記念で記念品を贈られ、1957年には婦選同窓会から表彰された。1967年7月27日、79歳で永眠した。
(折井美耶子)

【事務局日誌】

1月12日 「新春トーク 小森陽一・米田佐代子対談」収録（たびせん・つなぐ主催）
1月14日 第5回理事会

コロナ感染症の影響で中止
1月21日 パネル委員会（オンライン）
2月10日 第4回常任理事会（オンライン）
2月18日 パネル委員会（オンライン）
2月27日 パネル委員会（オンライン）
3月9日 パネル委員会（オンライン）
3月11日 第6回理事会（オンライン）

お詫びと訂正

前号第112号 4面「母性保護論争と私たちの今」の「山川菊枝」は誤りで正しくは「山川菊栄」でした。お詫びして訂正いたします。

*「平塚らいてうの生き方を今に学ぶ」

1面で紹介している奥村直史氏による小集会はYouTubeで見ることが出来ます。



5月22日に第22回通常総会を開催、今年もコロナ禍のもとで多くの委任状をいただき、予定の議事を終了しました。らいてうの家はコロナ禍にもかかわらず会員の奮闘で4月24日にオープンしました(2面)。総会では、「家」の前の太陽光発電設置計画が「終了」したことは私たちの運動の成果であるとの報告を受け、これまでの経験をまとめること、自然エネルギーの在り方やあずまや高原の今後について引き続き考えていくことを確認しました(3面)。

〔総会報告〕

らいてう没後50年・『青鞥』創刊110周年
11・20記念のつとめの企画決まる

平塚らいてうの会ニュース

らいてう没後50年・『青鞥』創刊110周年

記念のつとめ **今 生かそう** らいてうのこころざし

11月20日(土) 午後 会場：新日本婦人の会(オンラインも)

報告：米田佐代子

発言：奥村直史 北原みのり 米山淳子

没後50年・『青鞥』創刊110周年企画の成功を

今年最大の事業である「らいてう没後50年・『青鞥』創刊110周年」企画。すでに、企画パネル、新公開日記の一部(複製)などは「家」に展示され、反響が広がっています。総会では記念のつとめの企画内容(別項)が提案・確認され、早速取り組みが始まっています。コロナ禍でオンライン併用の可能性が高く、新たな挑戦となりますが、これまでにならぬ参加者の広がりを実現し、らいてうのこころざしをどう受けつぎ生かすかを語り合う場にしたいものです。

当会所蔵の「らいてう資料」の保存活用は長ら

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

く会の懸案事項でしたが、2021年度中を目途に奥村家所蔵の資料と共に法政大学大原社会問題研究所に寄贈することが確認されました。今後の資料整理、活用、公開・非公開についてなど、詳細は慎重に検討していくとの報告がありました。

会と「家」の活動の維持発展めざし

会の定款変更が承認され、役員体制は会長制から代表理事制に変更されます。東京都の定款変更認証を待ち、秋には理事会で代表理事が互選されます。それまでは、今年度の役員(別項)が会の運営にあたります。当会にとって、記念すべき大事な一年のスタートです。これまでも、会と「家」はその維持発展のため、ご寄附やボランティア活動をはじめ、みなさまのご協力を仰いで参りました。「平和構築にジェンダー視点を」が国際的な流れとなっている今、記念企画を成功させて、改めてらいてうを発見し、そのこころざしを生かすことができるよう、みなさまの方の変わらぬご支援を心よりお願い申し上げます。

今年度の役員

会長：米田佐代子

副会長：井上美穂子、折井美耶子、沓掛美知子、

小林明子、堀江ゆり、三留弥生 事務局長：金輪

さみ子 理事：青木俊子、植草充代、北澤有希

子、木村見江、久野泉、倉橋純子、小林典子、竹

花みい子、宮下昌子、山田繁子、若尾伸子

監事：佐久間由美子、由比ヶ濱直子

2021年 らいてうの家 オープン



4月24日(土)午後から、例年より規模を縮小してオープンセレモニーを催しました。数日前、共同通信等で「未公開日記公開」の記事が載ったため、共同通信・地元新聞の記者の方々や一般の方々も来館し、32名の参加でした。玄関には、会員の方の厚意によりマーガレットの大鉢とパンジーが飾られ、来館者を出迎えました。

依然としたコロナ禍の中で4月にオープンでき嬉しいという司会の言葉に始まり、上田真田らいてうの会の沓掛会長の挨拶がありました。緊急事態宣言が出される直前という理由で米田館長の来館が叶わず残念であること、今日の学習会のための補足説明を本日午前3時に送ってくださったこと、その資料をもとに学習会ではらいてうさんの

このころざしをくみ取りたいと述べました。
続いて地元の声楽家・深井佐代子さん(伴



奏・西沢さち子さん)の独唱に聞き入りました。春の歌を2曲、「この道」、カンツォーネを2曲、そして最後に「いのちの歌」がロフトから響きわたりました。マスクをしての歌唱にもかかわらずその圧倒的声量の美しい歌声は、聴衆にエネルギーを与え、オープニングに相応しいものでした。

学習会では、米田館長に代わり元上田らいてうの会会長の杉山さんより「新発見の平塚らいてう資料についての補足的解説」―米田佐代子編―をもとに説明がありました。1950年に発表された「非武装国日本女性の講和問題についての希望要項」について特に取り上げ、今につながるという事で読み上げて皆で確認をしました。非武装、世界平和という内容は次世代に引き継ぐべき課題であり、「右でも左でもなく、女性としての視点で戦争に反対する」という意思表示をすべきだ」と考えたらいてうさんの姿勢を受け継いでいかなければならないと述べました。

この後、今年度の6枚のパネルについて、沓掛会長より解説がありました。禅の修行、『青鞥』発刊、恋愛、結婚、出産、家庭、戦争体験、戦後のらいてうさんのライフステージを通して、女性の権利向上や世界平和実現に向けての運動等に関わっていった過程を端的にまとめて記載しているという内容を、更に要約して話してもらいました。今回公開の日記やノートには、「非武装国日本女性の講和問題についての希望要項」の草案や婦人の総意を代表する声明を出すべきと考えるに至った経過が綴られています。らいてう自伝(戦後篇)の裏付けや背景、言動の意義も含め、7月

予定のらいてう講座で米田館長に熱く語ってほしいと締めくくりました。

その後、地元新聞を始めとしてこれまでになく



多くの新聞に「らいてうの家オープン」の記事が載りました。これにより、一人でも多くの方が来館してくれるといいなと思います。(宮下昌子)

平塚らいてう没後50年特別展

らいてうの軌跡―田端で過ごした時代を中心に
社会活動から家庭的な一面まで紹介

田端文士村記念館 ☎03・5685・5171

(JR山手線・京浜東北線田端駅北口徒歩2分)
6/11・9/19 10時〜17時 月曜休館

終了

あずまや高原太陽光発電計画
地元と全国の反対運動みのる！



2017年から立ち続ける看板

計画課にも同様の応答があり、計画は終了したものと判断しました。正式な書面回答はありませんが、会としては現在の土地所有者による計画は終了（撤退）と判断しました。

これは、地元大日向自治会や住民のみなさん、地元会員、別荘自治会などの反対をはじめ、全国から集まった署名、また上田市による「国立公園内設置を推奨しない」とする規制条例の策定など、多くの声がみのった大きな成果です。みなさんのご協力に深く感謝いたします。らいてうの会では、運動のまとめを作成する予定です。

ただし、隣接のあずまや高原ホテルは昨年コロナ禍の影響で廃業、このままではあずまや高原の

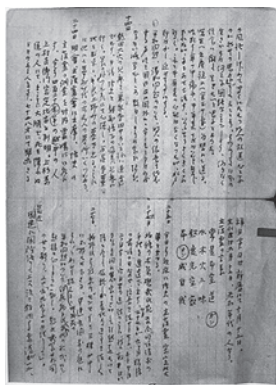
環境が悪化しらいてうの家にも影響が及びかねません。守り抜いた自然を生かし多くの人がとの「いこいのひろば」となるような方向でホテルの再生も望まれます。

（米田佐代子）

「らいてう日記」公開に大きな反響

資料を整理公開へ

らいてうの家では、「青鞥」創刊110年「平塚らいてう没後50年」を記念して、らいてうの生涯を振り返るパネル展示とともに、未公開であったらいてうの1948年から50年代初めの日記（奥村家所蔵）



1950年の「希望要項」に直接関連する記述が見られる「らいてう日記」

の一部を複製展示（資料劣化のため現物展示見合わせ）しました。

このニュースは共同通信の配信で大きな反響を呼び、北海道から沖縄まで約

30紙にのぼる地方紙と全国紙の長野県版などで報道されました（一覧はらいてうの会ホームページ）。らいてうの家オープンには新聞取材陣が詰めかけ、その後も問い合わせが続いています。

これは、らいてうが1950年6月、野上弥生子らとともに「非武装国日本女性の講和問題についての希望要項」という声明を発表、「軍事基地反対」「戦争非協力」の立場から単独講和反対を訴えたとき、「思い悩み」ながら「女性が平和について発言しなくては」と自ら草案を書いたいきさつがリアルに書き込まれたものです。「女性が自分で考え行動する」というらいてうの信条は、「女は黙っていない」という現代のさきがけでした。7月11日にはらいてうの家で日記をめぐる講座（講師は米田会長）開催の予定です。

なお、この資料を含むらいてうの生資料は、らいてうの会保存の資料と併せて法政大学大原社会問題研究所に整理公開を委ねる方向で、現在準備中です。詳細は後日報告します。（米田佐代子）

らいてうの「動く映像」発見！

中部日本放送（中京エリア 愛知・岐阜・三重）が1967年1月に放送したドキュメント番組『この100年―女性解放―』に、らいてうが登場していることがわかりました。6月27日に再放送。らいてうの「動く映像」はほとんどないので、貴重です。DVDが入手出来たらみんなで見ましょう。

シリーズ「新婦人協会の人々」No.8



河崎 なつ

河崎なつは、日本母親大会の委員長として、戦後の女性運動の一角を強力に推進した人として知られているが、その河崎がはじめてかわった女性運動は新婦人協会だった。

なつは1889年奈良県五条町で生まれた。奈良女子師範を卒業したのち、五条小学校に勤務したが、上京し女子高等師範に学び、東京女子大が創立されると作文の教師となった。そのころ流行したスペイン風邪にかり長い療養生活を送ったが、そのなかで学校教育だけでは果たされない社会の矛盾に目を開かされた。大正デモクラシーのさなか、国家主義的公教育に疑問をもったなつは、西村伊作の自由と個性を尊重する文化学院（1921年創立）に共鳴し設立に協力し、教師となった。

1919（大正8）年発足の新婦人協会に、なつがいつ入会したか定かではないが、「本部通信」の会費領収欄には必ずなつの名前が記載されている。教育者という立場から、あまり表立った活動は控えていたのだろう。しかし女教員会の結成には中心になって動いたという。また当時活発だった学生運動にかかわった女子学生たちを理解

し、つねに援助し続けてもいた。婦選獲得同盟や保育運動などにも力を注ぎ、無産者託児所には多額の財政的援助をしていた。

戦後、民法改正のための司法法制審議会委員となり、家族制度廃止に尽力。1947年第1回参議院選挙に全国区で当選し、6年間母と子の問題に取り組んだ。1953年、日本婦人団体連合会結成にあたっては陰から尽力した。ビキニ環境でのアメリカの水爆実験を機に巻き起こった平和運動は、1955年日本母親大会の発足につながった。なつは大会事務局長を務め、56年から66年に病没するまで大会委員長を務めた。

なつにとって最後の大会となった第12回日本母親大会での「母親が変われば社会が変わる」はなつの絶唱となった。1966年11月16日、77歳で永眠。

奥村直史さんの新著



平凡社ライブラリー
(1500円＋税)

奥村直史さんが『平塚らいてう―その思想と孫から見た素顔』（平凡社ライブラリー）を出版されました。10年前の新書版にオリジナルな一章をくわえ、らいてうが戦中の動揺から戦後自ら平和

の思想を紡ぎだして行動する過程を考察した待望の増補版。

追悼 飯村しのぶさん

3月22日、本会理事の飯村しのぶさんが急逝されました。ご闘病中とうかがっていましたが、あまりにも若く、早すぎるお別れに言葉がありません。心から哀悼の意を表させていただきます。飯村さんは、東京都立大学卒業後、東京図書株式会社第二編集部長として活躍、その経験を生かして本会では『平塚らいてうの会紀要』編集を担当されました。テープ起こしや割付、校正まで一手に引き受け、どんな難問にも苦情を言わず「だいじょうぶ」と仕上げてくださいったときの笑顔にいつもはげまされました。今は、静かに休みくださいますことを。（米田佐代子）

【事務局日誌】

- 4月2日 紀要編集会議
- 4月6日 没後50年記念のつどい相談会（オンライン）
- 4月8日 第5回常任理事会（オンライン）
- 4月13日 共同通信取材・未公開日記
- 4月17日（19日）らいてうの家オープン準備
- 4月23日 没後50年記念のつどい相談会（オンライン）
- 4月24日 らいてうの家オープン
- 5月6日 2020年度会計監査を受ける
- 5月13日 第7回理事会（オンライン）
- 5月22日 第22回通常総会・第1回理事会（於新婦人中央本部会議室）
- 6月6日 森のめぐみ講座①らいてうの庭の整備
- 6月11日 第2回理事会（オンライン）

らいてう没後50年・『青鞥』創刊110周年
 記念のつどい 今 生かそう らいてうのこころざし
 11月20日(土)午後 1時30分～4時15分(オンライン)

「墓調報告」

米田佐代子(平塚らいてうの会会長・らいてうの家館長)



1934年生まれ。女性史研究者。山梨県立女子短期大学教授退任後、平塚らいてうの会会長としてらいてうの家建設にあたる。総合女性史学会の代表委員を務め、生活者としての平和思想家・平塚らいてうの再発見、「女性がつくる平和世界」構想を問う。著書『平塚らいてう』(単著)、『平塚らいてう評論集』(共編)など。

らいてうの会ニュース

発行
 平塚らいてうの会
 〒112-0002
 東京都文京区
 小石川
 5-10-20-5F
 TEL・FAX
 03-3818-8626

つどいにお招きする発言者のみなさん



奥村直史さん(らいてうの孫)

1945年東京・世田谷生まれ。早稲田大学文学部哲学科心理学専修卒業、2005年まで国立精神・神経センター国府台病院に心理療法師として勤務。著書『平塚らいてう―その思想と孫から見た素顔』(平凡社ライブラリー)2021年など。



北原みのりさん
 (ラブピースクラブ代表・シスターフッド出版社アジユマブックス代表・作家)

1970年生まれ。津田塾大学卒。日本女子大学院で教育心理学専攻。1996年フェミニズムの視点での女性向けセクシユアルプレジャーショップ『ラブピースクラブ』設立。「ポルノ被害と性暴力を考える会」理事、慰安婦問題日韓合意に反対する一般社団法人「希望のたね基金」理事など、女性の権利のために活動。

ビデオメッセージ

中満泉さん

(国連事務次長・軍縮問題担当上級代表)



日本人女性初の国連事務次長として、軍縮部門の最高責任者を務める。2017年に就任以来、毎年広島、長崎の平和記念式典に出席。今年1月に発効した核兵器禁止条約が2017年に国連で採択されたときの責任者。現在は同条約の第1回締約国会議の準備で多忙ななか、「平塚らいてうの会は核軍縮を会の基本的な目的の一つにしているのですから」と、つどいへのビデオメッセージを快諾。



米山淳子さん
 (新日本婦人の会会長、日本婦人団体連合会副会長)

1959年生まれ。日本女子大学大学院で社会学福祉、女性史を学び、学生運動から女性運動へ。らいてうが創立のよびかけ人となった新日本婦人の会は、核兵器廃絶、ジェンダー平等、国際連帯など草の根からの運動を積み上げ、2003年国連NGOに認証され、来年60周年を迎える。広島出身。

『らいてうの家』に集う



スタンドグラス越しの光の中で…

7月11日、久しぶりに「らいてうの家」に活気が戻ってきました。

米田館長を迎えて 今年度最初の「らいてう講座」が実施されたのです。コロナ禍という事で、全館窓を開け放ち聴講者人数を絞るなどして、できる限りの対策を施しての講座です。

演題は「新発見のらいてうに見るらいてう像」――没後50年の今、そのころざしを生かすらいてうさんの自筆の日記も拝見できるというので、聴講する我々も少し緊張気味に耳を澄ましておりました。スタンドグラスを背にした米田館長の話が始まりました。少し後ろに席を取っていた私でしたが頬にあたる

涼やかな心地よい風の中で聴く話はいつも以上に心に響いてきたのです。ふと窓越しに庭を見れば目に飛び込む緑の林。風が吹き白樺の木も揺れてそこに雨が強くなったり弱くなったりしています。遠くから聞こえていた雷鳴もいつの間にからいてうの家の真上から大きな音を響かせます。そんな山の天気の中でも米田館長のお話は途切れることなくゆったりと進んでいくのでした。26名ほどの参加者も満足げに聞き入っていました。

そんな様子を眺めると妙に感動が湧きあがるのでした。「らいてうの家」で、行方からこその「何か」がある！

最後にらいてうさん自筆の日記帳を一瞬ではありましたが、手に取って拝見する機会を持たせていただけました。しかし手に触れた瞬間、個人情報報の最たるものである日記を赤の他人が触れてしまった事の戸惑いを感じました。しかしながら、日記を残されていたということは、ご自分の活動や想いを後世に繋げるという使命感をお持ちだったと解釈させて頂きました。ご家族のご理解、ご協力にも感謝を忘れてはなりません。

そして、その思いを私たちが預かっていることを再認識した1日であり「らいてうの家」の目に見えぬパワーを感じた1日でもありました。

(小林典子)



笑顔と花でお出迎え

最高裁判決をうけ

夫婦別姓にするために

今やるべきこと



弁護士
(ひめじやら法律事務所)

杉井静子

今年6月、最高裁は2015年の判決(前判決という)に続いて夫婦別姓を認めていない民法や戸籍法の制度は「合憲」との判断をしました。がっかりですが、15人の裁判官のうち4人の反対意見は多数意見の問題点を詳細に検討して、今後の展望も見えてきました。

前判決の合憲性の論拠は

- ①氏に関する利益は人格権ではない、
- ②氏は家族の呼称である、
- ③改氏による不利益は通称使用で緩和される、というものでした。

そして今回の決定は前判決後の諸事情等を踏まえてもその判断を変更する必要があるというものでした。

反対意見は

- ①氏は名と切り離すべきでなく、氏名は憲法上の人格権であること、
- ②夫婦同氏は「家」制度に起因するが、

交差する——らいてう、

イサム・ノグチとその母

鎌倉・茅ヶ崎



イサムの母レオニー・ギルモア

『青鞥』発刊110年の今年、「イサム・ノグチ」発見の道」展が東京都美術館で開催され、彼の到達点とされる石彫を含む作品群は大きな感動を与えました。さらに、美術館という特権的な場で楽しまれるものを超えて、テクノロジの偏重によって失われる肉体と自然の調和や、地域の文化や過去の伝統を尊重するために「庭」から公園、大地の彫刻に至ったイサム・ノグチを知りました。

イサムのこの痛烈な近代批判の淵源の一つには彼の2才から13才までの11年間の日本体験があると思われれます。

イサムの母レオニー・ギルモアは、ニューヨークの貧困なアイルランド移民の家庭に生まれましたが、奨学金を得てプリンマー大学（男女同権の理念で創られた女子大学、3学年上に津田梅子が在学）を卒業、在米中の日本人ヨネ・ノグチの英詩の創作を手伝う中でイサムを私生児として出産しました。レオニーは、日系人排斥の強まるアメリカの現実に直面してイサムを「アメリカと比較にならない文化の伝統を持つ日

本でアーティストの道を進ませる」夢を抱いて、1907年に来日しました。

らいてうは「塩原事件」の後の騒動を避けて鎌倉円覚寺に家を借りて暮らしていましたが、自伝によると「そのころ、ちょうど詩人のヨネ・野口が同じ円覚寺境内に一人で住んでいて、散歩の時間を合わせたこともありました。食事を運ぶ小母さんから、アメリカ人の奥さんがたまに訪ねてみても長くはない（中略）」というような噂話も耳に入りました。」レオニーはイサムを連れて、ヨネの詩作の援助のために訪れていました。



イサムと母が共同設計した丸窓のある家

また、らいてうが茅ヶ崎に病後の夫博史と暮らしていた時期、同じ茅ヶ崎でイサムは母と共同設計した家で暮らし、丸窓からの夕暮れ時の富士山の眺めは「美へのもっとも鮮烈な最初の目覚めとなった。その時の感動が、体の一部のように生涯残った」といいます。

らいてうとイサム、共に近代を超えて人間の解放を願った二人の交差する時と空間の地続きに私たちは生きていると思われれます。

(三留弥生)

つどい(1面)の申し込み方法

締め切り：10月25日

(定員になり次第締め切ります。)

宛先：平塚らいてうの会

raichou@nifty.com

* ZOOM の使用についてのご質問にはお答えできません。

申し込みの際は、件名「つどい」とし下記の項目をお知らせください。

- ①名前
- ②住所（都道府県名）
- ③電話番号
- ④メールアドレス

家族の多様化が進んでいる今日、氏は夫婦・家族の識別に使われてない、という実態を指摘しています。

そして前判決以降の旧姓使用拡大で、国の機関での公的文書作成でも認められるようになったことから夫婦同氏の強制が社会的に通用しなくなっています。前判決後、国連の女性差別撤廃委員会から3度目の法改正の正式勧告をうけたということは、国会の立法裁量を超えているので違憲であると結論づけています。私たちは100年前事実婚を実践したらいてうの意志を引きつぐものとして来るべき総選挙でジェンダー平等を推進する議員を格段に増やして、選択的夫婦別姓を認める民法改正を実現させる！その決意を固めようではありませんか。

シリーズ「新婦人協会の人々」No.9



尹心徳（恵）

（ゆん・しむどく）

尹心徳は、新婦人協会に参加し、『女性同盟』にも執筆した唯一の朝鮮女性である。

尹は1897年平壤で生まれた。両親は熱心なキリスト教徒で、子どもたち4人にはすべて新しい教育を受けさせた。尹は女学校卒業後一年余り教師をしていたが、音楽の才能を開花させるため朝鮮総督府の奨学金をもらって、留学生として日本に渡った。

日本では青山女学院を経て、1918年東京音楽学校の音楽科に入学した。日本で暮らす男子学生らとも知り合い、朝鮮人労働者団体同友会などの運営費を集めるため、故国で巡回公演会などを行い、ここで恋人となる早大留学生の金祐鎮と出会った。金には親の定めた妻がおり、「家」制度の矛盾に悩んでいたと思われる。

1921年新婦人協会の学習会に参加し、『女性同盟』7号に「朝鮮の婦人について」を執筆した。「朝鮮のために：新しい教育を」そして「新

しい女によって」祖国の解放をと書いている。

1922年東京音楽学校を卒業し、翌年帰国。銅路中央青年会館で、朝鮮初のソプラノ歌手としてデビュー、豊かな美声で人々を魅了した。

金も卒業後帰国したが、文学と演劇の道に進みたい希望が「家」の反対にあり、1926年再び日本に渡った。尹も日本のレコード会社との契約と録音のため日本へ。8月1日、レコーディングが終わったのち、もう一曲と希望した録音が「ドナウ河のさざなみ」という曲に尹が詩をつけた「死の賛美」という曲だった。

8月4日、二人は一緒に帰国の途次、玄界灘に身を投じて、29年の短い生涯を終えた。彼女の遺書ともなった「死の賛美」は空前のヒットとなった。現在韓国ではドラマ化もされている。

* * *

平塚らいてうが、市川房枝を誘って1919年に始めた新婦人協会には、全国から多数の女性に参加、のみならず男性も、さらには外国の女性も参加している。会員名簿が残されていないので、正確に人数は把握できていないうえに、正会員、賛助会員、特別会員、維持会員などと分かれてお



ドメス出版発行

り非常に分かりにくい。かつて私たち、女性の歴史研究会で出版した『新婦人協会の人びと』では、女性512人、男性

234人、計746人としている。

しかし、そのほか表面にはでていない機関誌『女性同盟』の読者や協力者など、かなりいたのではないかと推測される。この「平塚らいてうの会ニュース」では、そのごく一部を紹介している。本号は外国の女性だが、このあと男性たちも紹介する予定でいる。

このニュースをお読みみなさま、「むかし、うちの祖母が入っていたかもしれない」という情報がありましたら、ぜひご一報ください。

（折井美耶子）

【事務局日誌】

7月8日 第1回常任理事会（オンライン併用）
7月20日 プラス・ワンとの打ち合わせ
8月31日 プラス・ワンとの打ち合わせ
9月9日 第3回理事会（オンライン併用）
* 8月14日～9月27日 新型コロナウイルス感染拡大により、らいてうの家は臨時休館しました。

▼会費、ご寄付などのご送金いつもありがとうございます、
ざいます。2021年度の会費未納の方は、
ご送金をよろしく願います。

● ゆうちょ銀行 郵便振替口座

00150-9-553046

NPO・平塚らいてうの会

● みずほ銀行新宿西口支店 普通預金

口座番号 4815505

特定非営利活動法人平塚らいてうの会

ビデオメッセージ

中満 泉^{さん}

(国連事務次長・軍縮担当上級代表)

らいてうが根深いジェンダーギャップの中で語った「元始、女性は大陽であった」は、現代にこそ生かされるべき言葉です。

男女格差がまだ大きい中ですが、近年、若い女性が最前線で活躍しています。男女が均等で同じ意思決定力を持ち、リーダーとなるような積極的な働き方が求められています。ジェンダー平等と女性の権利は、平和と核兵器のない世界を達成し、よりよい未来を作るために必要不可欠です。ともに力を合わせていきましょう。

11月20日のつどいには、全国各地から約150名の視聴者が参加しました。

折井美耶子副会長の挨拶の後、中満泉さんのビデオメッセージ、米田佐代子会長の基調報告に続き、3人のゲストが発言しました(2・3面)。最後に、杵掛美智子副会長が閉会挨拶をしました。

らいてう没後50年・『青鞥』創刊110周年
記念のつどい

今生かそうらいてうのつどい

(オンライン開催)

よはうの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

基調報告

米田佐代子(らいてうの会会長)

「後ろを振り向かない」

— 思うことをまっすぐに貫く精神

幼い時から自分の思ったことを簡単に引つめない子どもだったらいてうは、御茶ノ水高等女学校では良妻賢母教育に疑問を抱き「結婚しない、自分で食べていく。」と決意。日本女子大学校では自分と向き合い禅に出会い、自己を解放する力を得ました。卒業後、「塩原事件」と呼ばれる「心中未遂事件」を起こし、スキャンダルにさらされますが、「自分の主人公は自分自身である」という信念を見出します。そして、「女性解放宣言」と言われる『青鞥』創刊号発刊の辞を発表しました。「女性はある天才だ」というすべての女性へのオマージュでした。1911年〜16年まで52冊発刊された『青鞥』には、セクハラ被告や家制度批判など、法や制度にしばられたなかで「心も体も自分のもの」という100年前の女性たちの発信が溢れています。

自愛から他愛へ

— 「世界民」思想への道

らいてうは奥村博史と出会い、当時の家制度のもとでの



結婚はせず、家を出て共同生活を始めます。子どもを持つ意思はなかったのですが、意図せぬ妊娠。墮胎罪に問われることを恐れるのではなく精神的にも経済的にも子を産み育てる自信がないと悩みましたが、2人の愛を完成するために出産を選びました。与謝野晶子らとの「母性保護論争」では子育てには社会保障制度が必要と訴えます。自己完成を求める「自愛主義」からそれを前提とした「他愛主義」に目覚めた語り、女性が子どものいのちを守るために自ら学び考える場の保障とそこから生まれる社会構想を実現するための政治的権利を要求したのです。

国家総動員の名の下、女性の戦争動員を強めた30年代には、多くの著名な女性作家、女性運動家が国策協力に転じ、らいてうも時局講演会に参加したり、戦死者遺族を激励する運動に加わったりしました。戦後もらいてうは民主化運動から距離を置いていましたが、戦争体制の中で日本の侵略戦争を見抜くことができなかったことを愧じ、日本国憲法9条と世界連邦思想に共鳴します。

女性が平和をつくる主人公に — 「主権者になった女性には戦争を止めさせる責任がある」

「戦時中女性は参政権もなかった。戦後女性は大権者になったのだから戦争を止めさせる責任がある」という原点に立ち、亡くなるまで揺るがぬ信念で平和を作る運動を、他者を受け入れ異なる意見であっても一致点で共同するという精神で続けました。そのころざしを受け継ぐことが必要なのではないでしょうか。

(文責・北澤)

らいてう没後50年・『青鞥』創刊110周年 記念のつどい

今 生かそう らいてうのこころざし

奥村直史さん

(らいてうの孫)



らいてうが抱いた問題意識、主張には、25歳から85歳までの間に大きな変化、変遷が見られます。明治の青春時代から、大正、昭和を経て、敗戦後25年たった1971年の最晩年まで、時代とともに直面する生活体験に伴って、らいてうの主張は移り変わってきています。

*

1911年、「元始、女性 は実に太陽であった」に始まる『青鞥』創刊の辞でらいてうが訴えたのは、女性 は独立した主体的な存在の はずなのに、現状はそうで はなく「奴隷生活」だ。現 在は隠されてしまっている

才能を自由に発揮させれば、だれもが天才として輝けるはずだ。その光を、太陽を取り戻さねばならない。そのためには自己内省を極め「無我」にならねばならないという主張でした。

*

1971年、らいてうが84歳の正月前後に書いた3枚の色紙から思いを膨らませて考えてみました。女性としての生活は、個人的なものではなく、宇宙を貫く大きな生命そのものの中に、一つになって生きるところにある。命とくらしを守るには仲間とつながりみんなで行動することが必要だ。無数の人間が公然と殺戮される戦争だけは絶対に拒否する。そんなたたかひの中から平和が生まれるに違いない。「たたかひ」は武力的なものではなく、議会制民主主義に基づく運動から、潜在している女性の「天才」は発揮され、自ら発する光で輝く「太陽」となることができるのです。

*

「人権、平等、平和」という目指すべき方向が、最初かららいてうの頭の中にあつたのではなく、既成の考えに囚われず、新しい生活体験に遭遇する度に「自分で考え」てきました。その結果、らいてうは「人権、平等、平和」という目指すべき理念を徐々に発見していったのです。内省し、瞑想し、心の最深部にあるに違いない本当の自分を探り当て、その「神性」に支えられた自分の思いを大切にし、表明し、行動に移す。それが「らいてうのこころざし」の根底にあります。その理念に基づく「非武装」「非交戦」の「協同自治社会」の創造をらいてうは目指したのです。

北原みのりさん (作家)



生を知り『市川房枝新聞』を作りました。

らいてうが車中で唾を吐かれたと聞き、フェミニストたちが、どのような思いでたたかってきたのかを突き付けられました。今もフェミニスト・10代の若い女性たちがSNSで叩かれ、振り向くと大きな恐怖が迫っている思いをしながら、発言していると感じます。それでも、「わきまえない・黙らない」のは、次の時代を切り開くためです。社会の福祉を変えていくために、信念を曲げずに発信し続けたらいてうさんを受け継ぐ次の世代がいることを紹介します。

*

最初にフラワーデモを呼びかけたのは2018年8月4日、東京医大での入試差別です。女性であることが理由で差別される悔しさから「集まりませんか」とツイッターしました。最初に駆けつけた自転車の前後に子どもを乗せた女性は「保育園に入れなかつたので正社員を諦めた。女性が諦めることで回るような社会はおかしいのですか!」と訴えました。プラカードを持った女性たちが集まり、語り合いました。「もしかしたら:と 思う方、弁護士に繋がります。連絡ください」と伝えたところ、その晩から連絡があり、被害者と繋がりました。裁判はコロナ禍で進展していません。



2019年3月、4件続いた性暴力事件の無罪判決に女性たちの怒りが爆発しました。

被害女性の不同意・恐怖の告発より、加害男性の同意と感じたとの供述が優先され、すべて無罪。最初の福岡判決から1カ月以内に声をあげるため、4月11日「最初の被害者は声をあげられない。With Youの気持ちを表明するために花を持って集まろう」と発信しました。訴えを聞く中で、性暴力被害者が話せないのではなく、私たちが社会が聞かなかつたのだと知りました。無罪判決はこの時期にだけ多かつたのではなく、報道に努力した女性記者の存在が大きかったことも分かりました。

＊

声を出せない女性たちの声を聞いた者として、どう応え、どう変

えていけるかが問われる運動です。引き継いできた「たたかい」を次の世代にどう繋いでいくのか、新たに自分に誓う元気を得ました。



米山淳子さん

(新日本婦人の会会長)

らいてうのことはや生き方、行動は今日の女性運動やたたかいの中に生き続けています。

新日本婦人の会は、1962年創立、個人参加の全国組織です。来年は60周年になります。創立を呼びかけたのは、らいてう、野上弥生子、羽仁説子、丸岡秀子、いわさきちひろさんたち各界の著名人32人です。らいてうは結成時にメッセージを寄せ、当時76歳で代表委員、後に顧問として激励し続けました。今も各地で「らいてうさんの呼びかけた会です」と新たな加入があります。

＊

らいてうは、「元祖わきまえない女」、ジェンダー平等の先駆けです。自らの能力を女性自身が自覚し、人間らしく自分らしく生きることを呼びかけました。

なかなか陽の目を見なかったジェンダー平等が大きく広がったのは、前オリンピック・パラリンピック組織委員会森会長の発言からです。「#わきまえない女」がSNS上を駆け巡り、「わきまえない」と言われても声をあげ続けるのが私たちのやり方です」と力強く発信し、東京新聞やNHKで大きく取りあげられました。

私たちは、臆せず、いつも声をあげ、そして権利を勝ち取ってきました。「誰もが大切にされる社会、女性の能力を生かせる社会をつくりたい」と運動を広げてきました。しかし、らいてうから100年経った今も、いまだ選択的夫婦別姓制度を獲得できていません。

コロナ禍の下、ジェンダー平等がクローズアップされ、切り開いた問題として「生理の貧困」があります。生理用品に困っているとはなかなか口にできないことですが、国や自治体に要請した結果、政府の男女共同参画の重点方針に明記され、支援が実現したのです。声をあげることによって新しい常識がうまれることを実感しました。

＊

らいてうの「戦争は絶対にだめ、人類と核兵器は共存しない」の思いを胸に出発した、ビキニ環礁での水爆実験反対運動では3200万人の署名を集め、日本母親大会や原水爆禁止運動の原点を成しました。今年1月核兵器禁止条約が発効し、私たちの運動が歴史を動かしたことを確信しています。国連事務次長の中満さんも「中心に活動したのが女性たちです」と評されています。

しかし、先の衆院選で改憲勢力が3分の2を超えました。参院選に向けた運動を強めていかなければなりません。野党共同をもっと強くしていくためにも、市民運動の力を合わせていきましょう。らいてうが新婦人に託した最後のメッセージ「いのちとくらしを守るみんなのたたかいの中から平和な未来が生まれる 新しい太陽がのぼる」をみんなで実現しましょう。

(文責・八巻)

【シリーズ】新婦人協会の人々 No.10



渡邊 シーリ
(わたなべ しーり)

シーリは1890年、フィンランドのソルダラで生まれた。父は学校の教師だったが、熱心なクリスチャンで、若い神学生たちに慕われていた。シーリは音楽の才能に恵まれ、フィンランドの国立音楽学校で声楽を学んだ。

渡邊忠雄は長野県の地主の息子だったが、村に来ていた宣教師の影響で熱心なクリスチャンとなり、牧師になるためフィンランドに渡り神学生となった。そして、ここでシーリと忠雄は出会い、愛し合い結婚した。

やがて2人は日本に旅立つが、イギリスやアメリカなど各地のルーテル教会を2年ほどめぐりあるき、その後長野の忠雄の生家に帰り着いた。この時からシーリには日本の旧家の嫁としての暮らしが始まった。畳の上に正座する日々、食べたことのない食事、親類縁者や近所の人たちへの挨拶など、厳しい生活だったと思われる。最初の子エイミはジフテリアで亡くなり、次いで長男忠恕

(ジャーナリストとなる) が生まれた。4年間の長野生活のうち、忠雄は東京・豊島のルーテル教会に牧師として赴任した。

そして生まれた次男に暁雄と名付けたのは「まるで人生の曙に出会ったよう」な気がしたからと語っている。そしてシーリはピアノを教え始める。

翌1920年、市川房枝に誘われて新婦人協会の発会式に出席したシーリは、「フィンランドでは女性の参政権があり、立候補もできます。代議士や裁判官もいます」と語り、「日本の婦人も早く、それと同じ、もしくはそれ以上の地位に進んでほしい」と述べている。

次の年シーリは、子どもたちを連れてフィンランドに里帰りをしたが、日本での暮らしの無理が出たのか大病を患った。忠恕はフィンランドの小学校に入学し、シーリの療養もかねて約3年間滞在した。そして日本に帰国した時には、新婦人協会は活動を終えて解散していた。

シーリは、当時の自由主義教育を掲げた西村伊作による文化学院で、音楽の教師となった。ピアノや声楽の教師として10年間情熱を注いだのち退職したが、「何事にも心を打ち込む誠実な方でした」と教え子は語っている。

戦時下、軽井沢の山荘に忠雄と二人で疎開した。1944年には忠雄を見送り、一人暮らしをしていたが、1950年脳溢血で倒れ、死去した。戦後、日本の女性が参政権を手にしたのは知っていただろうが、果たしてどう見ていただろうか。

(折井美耶子)

【事務局日誌】

10月14日 第2回常任理事会・つどい実行委員会
(オンライン併用)

10月26日 らいてうの家 大掃除

10月27・28日 らいてうの家 展示収納作業

冬季休館

11月4日 プラスワンとの打ち合わせ

11月11日 第4回理事会(オンライン併用)

11月15日 プラスワン、スケッチルームとの打ち合わせ

11月18日 つどい実行委員会

11月20日 らいてう没後50年・『青鞥』創刊

110周年記念のつどい

今生かそう らいてうのころざし
(オンライン開催)

12月9日 第3回常任理事会(オンライン併用)

12月21日 紀要編集会議

会の定款変更認証と役員体制について

5月の第22回通常総会で定款変更が承認され、会の役員体制は会長制から代表理事制に変更されることになりました。その後、東京都で定款変更が認証され、秋の理事会で代表理事を互選する予定でしたが、11月20日のつどい準備などでその体制をとることが出来ていません。来年の総会まで現体制で会の運営にあたることになりましたので、引き続きよろしくお願いいたします。

平塚らいてうの会ニュース

●総会で語り合おう

「私たちに」

戦争を止めさせる責任がある

この一年は、らいてうの会にとってとりわけ重要な年でした。

まず、「らいてう没後50年・『青鞥』創刊110周年記念のつどい」を11月20日に開催しました。

コロナ禍のもとでどんなつどいにするかと悩みつつの準備でしたが、試行錯誤のなかでオンライン開催とし、全国から150人の参加がありました。米田会長の基調報告、奥村、北原、米山3氏の発言、そして中満泉国連軍縮担当上級代表のメッセージを受け、今この時代にらいてうのこころざしをどう受けつぎ生かすかを豊かに語り合うことができました。つどいの様子は会のホームページで見られますし、詳しい記録は『紀要第14号』に掲載されます。

もう一つは、会の所蔵する「らいてう資料」の保存活用への取り組みです。これについては、2021年度中を目途に奥村家所蔵の資料と共に法政大学大原社会問題研究所に寄贈することを確認し、資料整理や調整を進めてきました（2面）。コロナ禍が続くなか、らいてうの家は4月にオ



ロシアのウクライナ侵略抗議（2月25日、東京・文京区）

ープン、夏はコロナの猛威で休館したものの7月にはらいてう講座を開催、10月閉館までがんばり、昨年を上回る来館者を迎えました。地元会員を中心とした会員の奮闘の賜物です。

「家」の前

の太陽光発電設置計画の「終了」を7月に確認したことも重要です。貴重な運動の経験をまとめ、あずまや高原の今後について引き続き考えていくため、会は報告書を作成します。

*

「核兵器も戦争もない世界を」ただ戦争だけが敵「他者を受け入れ一致点で共同を」——らいてうのこころざしを生かすことがまさに今求められているという現実が、私たちを襲っています。

2月24日に始まったウクライナへのロシアの軍

事侵犯。メディアでは連日戦時用語が飛び交っています。いかなる背景があれ、他国の主権を武力で侵害し、市民の命を奪い生活を破壊、原発砲撃、核による威嚇など、断じて許されません。数百万といわれる避難民の多くは女性、子どもです。

ロシアの暴挙への抗議が国内外で広がっていることは心強く、会もその一員でありたいと思います。逆に、戦後の国際平和秩序を破壊すること事態を受けて、国連無力論、9条改憲、「核共有」論までが流されていることは重大であり、私たちは、この動きを決して許してはなりません。

「私たち主権者には、戦争を止めさせる責任がある」のですから。

平塚らいてうの会は3月10日、ロシアの侵略に抗議し撤退を求める声明（本ニュースに同封）を発表し、会ホームページに掲載、ロシア大使館に送付しました。

*

会と「家」の活動の維持発展に向けて、意義ある総会となりますように。（堀江ゆり）

第23回通常総会のご案内

日時 2022年5月28日（土）

13時半開会

会場 東京ウイメンズプラザ 視聴覚室

議題 ①21年度事業報告と決算報告

②22年度事業計画（案）と予算（案）

③新役員選出 ④その他

「らいてう資料」を

奥村家と共同で

法政大学大原社研に寄贈

法政大学大原社会問題研究所に、らいてうの会が保管していた「らいてう資料」の整理公開を委ねる件については、長期の準備期間を経て昨年度総会で奥村家所蔵の資料とあわせて大原社研に寄贈することを確認し、3月15日に搬入しました。

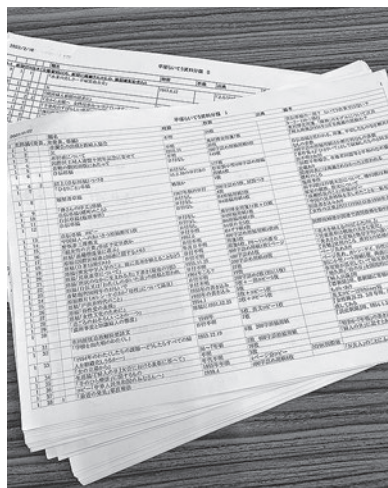
この資料は、小林登美枝さんが自伝や著作集編集のため奥村家から一部をご自宅に移され、小林家に残されていたもの（小林さん自身の資料・印刷物等を含む）と思われ、小林さん没後、会の責任で保存整理してきました。このたびはらいてうのご遺族奥村直史さんから「奥村家で保存中の資料と会の資料は一体のものである」ことを前提に、「平塚らいてう資料」として大原社研に共同で寄贈するご提案をいただき、決定したものです。

らいてうの会は、これまでも資料紹介や論文発表に つとめてきましたが、会としての研究活動や資料の公開利用実現までには至りませんでした。ここには日記や書簡等の一級資料が含まれていました。らいてう没後刊行された自伝の戦後編には、ここから多数引用されていることが判明、使われなかった部分も併せてらいてうの思想と行動をより深く解明するうえで重要な資料です。奥村家所蔵資料と一体化することでその価値と公開の必要性がさらに高まったと言えます。

大原社研は、戦前から労働問題や社会運動資料収集に定評があり、戦前の産児制限運動や消費組合運動、普選運動など間接的にらいてうとかかわりのある資料も収蔵されています。大学付置機関として研究面でも期待されます。紙資料の劣化が心配される現在、資料を保全し、公開利用が可能になることは、今後のらいてう研究進展に寄与するでしょう。また、展示のための貸出し等も、大原社研のルールに基づいて可能ということです。

（米田佐代子）

資料整理の状況と 会のこれからの課題



分類一覧表

らいてうの会では資料の整理・分類を行い、分類カードと分類一覧表（A4用紙約50頁）を作成し、資料の劣化を防ぐため中性紙の封筒に入れ、中性紙の収納ケースに収納して保管してきました。この資料はごく一部がらいてうの家での展

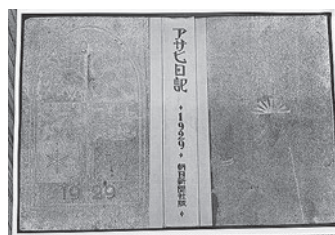
示、他館への貸し出し、『紀要』での発表に供されましたが、会員の中で共有されることなく、その内容を検討し、研究することが不十分なまま今回の寄贈に至りました。

しかし、今後の会の展示、研究活動のためには、資料の内容を把握し、記録を残すことが必須であると考えました。寄贈までの短期間でしたが、らいてうの自筆資料を中心に、はじめて詳しく目を通し、資料のスキャンとコピーに努めました。

その中で多くの貴重な記録を見出しましたが、特記すべきは、「大正二年日記断片」「一九二九年日記」の存在です。「一九二九年日記」の記述は1月1日から4月8日までの短期間ですが、2月まではほぼ毎日、記されていて、自伝や評論からは見えないらいてうの生活とその時代の姿を知ることができる貴重な資料でした。会としてこの日記を公開する必要を痛感し、デジタル化と共に、『紀要』に読み下し文を掲載します。

また、ハガキの裏やメモ帳に記された細々とした多量のメモ、戦前戦後の出納帳、小型手帳、手紙、家族の資料、婦人運動関連の多くの手紙や原稿などは、いずれも看過できない重要な内容を含んでいました。これらの新資料によってらいてうの新たな側面を明らかにすることが課題です。

（三留弥生）



1929年日記

偲ぶ

— らいてうの会を支えてくださった大河内昭子さん、鐘ヶ江洋子さん、高良留美子さん、瀬戸内寂聴さんに感謝の気持ちをこめて —

大河内昭子さん

「義母がらいてうさんと同級生だったんですよ」

と、突然「らいてうの家」に飛び込んでくださった大河内さん。

すっかり「らいてうの家」のたたずまいとそこで過ごす時間ののどかさ、気に入られて、笹刈りに・きのこ狩りに・大掃除に・源氏物語講座にと参加して、全身で楽しんでくださった姿が忘れられない。夏の来館時に千曲川のツケバへ米田さんと共にご案内した。アユの塩焼きを無邪気にばくついておられた姿が忘れられない。

入り口の橋が老朽化してきたら改修費を負担してくださった、電気ピアノやパソコンも寄贈してくださったりと、いつも「らいてうの家」を気にかけてくださった。さようなら 大河内昭子さん。 (杉山洋子)

鐘ヶ江洋子さん

茅ヶ崎に「らいてうの碑」を建てたい意向を前会長、小林登美枝さんに聞き、奥村洋の高校時代からの友人で当時茅ヶ崎市議会議員の鐘ヶ江さんを紹介。小林さん、洋、直史が碑を建てる

候補地を探して、らいてうと奥村博史が初めて出会った茅ヶ崎市内、南湖院、人參湯隣の家などを鐘ヶ江洋子さんと一緒に歩いたのが1996年夏です。彼女が呼びかけた「茅ヶ崎平塚らいてう碑を建てる会」と「平塚らいてうを記念する会」と協同で碑の建立に動き、1998年5月23日に茅ヶ崎駅南の高砂緑地に碑は建ち、奥村とも（らいてうのひ孫）が除幕の紐を引き、羽田澄子監督が「元始、女性は大陽であったー平塚らいてうの生涯」の撮影を開始しました。

鐘ヶ江さんのお力添えが無ければ「らいてう碑」はできなかったと思っています。 (奥村洋)

高良留美子さん

高良留美子さんは、いつもらいてうの会の応援者だった。2010年にらいてうの会がNPTR再検討会議要請行動に代表を送ったときは、堀場清子さん、岸田衿子さんとともに「3人の女性詩人の詩」を寄せられ、ニューヨークの女性集会で紹介された。らいてうの家の目の前に自然破壊の太陽パネル計画が持ち上がったときも、反対のメッセージをくださった。ご自身が創設された「女性文化賞」の第13回（2009年）受賞者に「らいてうの会」ではなく「らいてうの家」を「地域の人びとの協同で、らいてうのこころざしを発信」と評価して選んでくださったのは高良さんの見識だった。今も感謝している。惜別の思いをこめて、高良さんをらいてうとともに記憶したい。高良さん、ありがとう。 (米田佐代子)

瀬戸内寂聴さん

2021年11月9日、瀬戸内寂聴さんは99歳で天寿を全うされた。

平塚らいてうを記念する会が発足し最初の「らいてう忌」（94年、津田ホール）で「らいてうの新しさ」として講演を行ったのが寂聴で、身振りも交えての熱演に聴衆は大喝采だった。そのとき寂聴が「私はらいてうさんをよく知らなかったのかもしれない」とつぶやいたことが、忘れられない。98年らいてう碑が茅ヶ崎に建立され、その除幕式の祝う会でも「ウーマンリブの元祖」などと語った。



らいてう碑の前の寂聴さん
小林登美枝さん、青山生子さん、櫛田ふきさんとともに

談で、「独立するに就いて両親に」は「らいてうの真骨頂を示すもの」と高く評価した。今ごろあちらで、らいてうと寂聴は語り合っているかもしれない。合掌。 (折井美耶子)

シリーズ「新婦人協会の人々」No.11



賀川豊彦

らいてうと賀川豊彦が初めて出会ったのは、1919年夏、『名古屋新聞』と中京婦人会が主催した婦人夏季講習会に、お互い講師として参加したときだった。同じ年の11月24日、大阪で開かれた第一回婦人会関西連合大会で、らいてうは新婦人協会の創立宣言をしたが、そのとき賀川豊彦と再び出会い、神戸の「貧民窟」などを案内された。らいてうは賀川に対して「大変な親しみを感ぜ」たという。賀川は新婦人協会の設立に賛成し、経済的支援をうるために阪神間の財界人をらいてうに紹介した。

1888（明治21）年、神戸で生まれた賀川は病弱だったこともあり、1909年に洗礼を受けてキリスト者として生きるようになった。1909年貧民救済と霊的救済を目的に、神戸市葺合（ふきあい）の「貧民街」に移住したが、救済事業だけでは「貧民」は救われなと思う、貧民のいない社会をつくることだと考えるようになる。14年プリンス頓大学とプリンス頓神学校

に入学のため渡米したが、そこで労働組合運動に触れて日本にもこの運動が必要だと痛感した。17年に帰国後、すぐに友愛会神戸連合会の活動に参加した。19年には鈴木文治らと関西労働同盟会を結成し、理事長となった。らいてうと出会ったのはこのころである。

川崎・三菱神戸造船所争議など関西でおきた大争議を指導したが、争議敗北の批判を受けて労働運動の指導的立場から退き、農民運動・水平社運動・協同組合運動などに活動の場を移した。

1924年に結成された政治研究会では執行委員となり、1926年の労働農民党結成では中央委員となった。1941年日米間に戦争の危機が訪れると、キリスト教平和使節団の一員としてアメリカを訪問している。敗戦後は、東久邇内閣の参与や貴族院議員にもなったが、その後、世界連邦運動に尽力して、1954年には世界連邦協議会副会長となった。1959年高松で伝道中に倒れ翌1960年心筋梗塞で死去、72歳だった。

1920年に刊行した『死線を越えて』は、当時の大ベストセラーとなり、多額の印税の一部は、新婦人協会にも寄付された。また妻の春子は新婦人協会に入会し神戸支部に属していたが、ちよつとした行き違いがあつて脱退して、覚醒婦人協会を立ち上げた。この活動の中の消費組合運動が、今日の神戸灘生協の原点といわれている。

*

なお「新婦人協会発足100年記念のつどい」は、豊彦・春子夫妻の孫にあたる富澤康子さんの発案もあつて2019年に行われた。

新婦人協会は、対議会も含む運動であるため、中心はあくまで女性であるが、多くの男性の協力が必要だと、らいてうは考えていた。そのため会の規約には、正会員は女性のみとしたが、賛助会員および維持会員については「男女」と明記した。そして会には多くの有名無名の男性が、さまざまな形で協力した。本紙にはそのうちの何人かを載せたいと思っている。（折井美耶子）

【事務局日誌】

- 1月13日 第5回理事会 （オンライン併用）
- 2月17日 第4回常任理事会 （オンライン）
- 2月22日 りいてう日記（1950年）書き起こし確認話し合い
- 3月10日 第6回理事会 （オンライン併用）
- 3月12日 上田らいてう資料を見る会 （上田プラザ・ゆう）
- 3月15日 りいてう資料 法政大学大原社会問題研究所へ寄贈搬入

*今年のらいてう忌はコロナウイルス感染症の影響で残念ながら行いません。新型コロナが収束し来年は実施できることを願っています。

*日程は変更するかもしれません。会のホームページをご覧ください。

*平塚らいてうの会事務局は、火・木・金の午前11時～午後4時開局しています。

それ以外の時はFAX 03-3818-8626
Eメール raichou@nifty.com へご連絡ください。



米田会長は事情により総会出席が叶わなかったため代わりに退任のメッセージが寄せられ、代読披露されました。長年の労に対して会場の皆さんの拍手で感謝の意を表しました。

金輪事務局長の報告を受けて、21年度の活動の貴重な成果を確認し、今年度の活動につなげていくことが語られました。

ウクライナ侵攻に抗し 平和とジェンダー平等をもとめて 力を尽くしましょう

5月28日、第23回通常総会を東京ウィメンズプラザで開催することができました。コロナ禍がいまだ終息しない中でしたが、多くの委任状と参加者として、予定の議事を終了することができました。コロナ禍により「らいてう忌」の催しを実施できなかったことは残念なことでした。

平塚らいてうの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

・「らいてう没後50年・『青踏』創刊110周年記念のつどい」は、会として初めてオンライン開催し、全国から150人の参加があり新聞にも報道されました。中満泉国連軍縮担当上級代表のメッセージに始まり、米田会長の基調報告、奥村、北原、米山各氏の発言で「今生かそうらいてうのころざし」をめぐっての豊かな語らいの場となりました。これからの会の活動の力になることでしょう。

・「ロシアはウクライナから即時撤退を」の声明文をロシア大使館に送付し（3月10日）、らいてうの平和への志を発信しました。

・「らいてう資料」を大原社会問題研究所に寄贈（3月15日）、貴重な資料の一部は、スキヤナーやコピーをして会として保存しました。らいてうの1950年日記と1929年日記はデジタル化しました。紀要14号は、発行準備中。会に残るらいてう関連資料についての検討を進めるとともに、近くオープン予定の新日本婦人の会の「平塚らいてう・女性運動資料室」（仮称）の展示準備に協力していきます。

・らいてうの家は、コロナにより、8月、9月を閉館とし、家でらいてう講座のほとんどが中止となりましたが、前年度を上回る140人の来館者がありました。主な運営を担った上田真田らい

てうの会の皆さんの底力が発揮されました。今年度の団体来館予約がすでに数件入っていることも力強いことです。

・あずまや高原のソーラーパネル設置計画の終了を受けて、設置反対運動の記録をまとめる作業を続けています。

・会員の高齢化による退会傾向が続いている中で、会員の輪を広げ、会費と寄付で運営されている会の財政の安定化を目指す必要があります。

（会場での討議から）

・らいてうの家をなぜ交通の便の悪いところに建てたのかという質問が出され、改めて、らいてう自身が求めた土地であること、自然の中にあることの積極的な意味などを考え合いたいと思いました。

・「らいてう資料」がなぜ大原社会問題研究所に寄贈されたのか、資料はいつオープンにされるのかなどの質問も出され、らいてう資料への関心の高さが実感されました。らいてう関連資料の研究、遺族の方から寄贈された書、絵画などの活用も進めたいと思います。

（三留弥生）

今年度役員

代表理事・沓掛美知子、堀江ゆり、三留弥生
事務局長・金輪きみ子、事務局次長・北澤有希子
理事・青木俊子、井上美穂子、植草充代、折井美耶子、木村見江、久野泉、倉橋純子、小林明子、竹花みい子、宮下昌子、山田繁子、若尾伸子
監事・佐久間由美子、由比ヶ濱直子

代表理事制へ 新体制スタート



平塚らいてうの会は「平塚らいてうを記念する会」という名称で1986年に発足し、2001年にNPO法人に発展。この度、会の役員体制は昨年の総会決定により会長制から代表理事制に変わり、今年の総会で新体制がスタートしました。

退任にあたって

「森のやまんば」から「平和の語りべ」に

米田佐代子

わたしの会長退任は昨年から決まっていたことですが、思いがけない事情のため今年に入ってから理事会にも総会にも出席できなくなり、最後まで任務を全うすることができませんでした。

これからの新体制にすべてをゆだね、退任のご挨拶いたします。

らいてうの家オープンから今日まで10数年、会員・理事のみなさんはもとより、全国の心ある方がた、長野県内の多くの方がたからいただいたご支援や励ましに、会としてもわたし個人としてもたくさん支えていただいたことを忘れません。ほんとうはらいてうの家で「森のやまんば」になりたいと思っていましたが、果たせないまま退くことに万感の思いがあります。

けれども、らいてうが守り抜こうとねがった

「日本国憲法九条」があやうい今、本会初代会長櫛田ふきさんが語ったとおり「沈黙は共犯」です。これからは都会の片隅で「巷（ちまた）のやまんば」になり、残り少ない人生を「平和の語りべ」として「行き着くところまで行ってみよう」と思っています。長い間ありがとうございます。



沓掛美智子

この度、定款変更に伴いまして代表理事に選任されました。よろしくお願いいたします。上田市にらいてうの家が建てられ

ると知り、そこから「平塚らいてうの会」と関わって参りました。没後50年の節目に、図らずも地元上田真田らいてうの会の会長職を杉山洋子氏、花岡静枝氏より受け継ぎました。微力ではございますが私なりに、らいてうの会発展のために努力していきたいと思えます。膨大ならいてうに関する資料が大原社研に寄贈されることになりました。このことは、今後、劣化が避けられない大切な資料を安心して保管していただけるということです。らいてうの自筆資料をワクワクして手に取る事はできなくなりましたが、何時でも学習できる状態になっています。新しい発見を目指したいものです。



総会で選出された新代表理事

「よろしくお願いします。」

33年前に日本婦人団体連合会（婦団連）事務局に入るまで、らいてうは私にとって「歴史上の」人でした。婦団連で国際活動を担当し、国際民主婦人連盟という、反戦平和、子どもの



堀江 ゆり

ンケートをまとめるのが私の会での初仕事でした。中央設計の永橋為成氏を設計アドバイザーに9人の女性建築士の設計、地元と全国の皆さんのご寄付、地元の業者の方々の尽力によってらいてうの家は完成し2006年にオープンしました。以後、「平和、協同、自然の広場」として、平塚らいてうの唯一の記念館として、多くの貴重な出会いと学びの場となりました。このかけがえのない場を育てていく仕事に、また未発表の資料を検討して、私たちの現在を照らしてくれるらいてうの姿を発見していく仕事に皆さんとともに微力を尽くしていきたいと思っています。



三留 弥生

2004年、らいてうの家建設のためのプロジェクトチームが発足し、全国の会員の方たちから寄せられた家への希望ア

「紀要 第14号」

8月発行予定 頒価700円

特集・記録

らいてう没後50年・『青鞥』創刊110周年記念のつどい
今 生かそう らいてうのころざし

開会の挨拶・折井美耶子 ビデオメッセージ・中満泉

基調報告・米田佐代子

発言・奥村直史、北原みのり、米山淳子

閉会の挨拶・沓掛美知子

戦後日記（1948—1950）解題

米田佐代子

1929年日記解題

三留弥生

大原社研へ寄贈する「らいてう資料」の概要

米田佐代子

太陽光発電計画中止の経過

小林典子

奥村博史の演劇と画業のパトロンについての一考察

田端文士村記念館研究員・種井丈

平塚らいてう戦後日記（1948—1950）と

1929年日記書き起こし

幸せ、女性の権利をめざす国際的な女性団体が戦後すぐにつくられていたことを知りました。婦団連がそうした国際的な動きと国内運動とをつなげる活動をしてきた団体で、初代会長らいてうが大きな役割を果たしていたことを知ったのはもって後です。2003年に婦団連会長になり、らいてうの会の副会長として「生誕130年」「没後50年」などに取り組み、今ようやく「らいてう」がわかり始めたところです。

「核も戦争もない世界」という当たり前の願いの実現の難しさを痛感する今、「らいてうのころざし」を胸に、みなさまと共に活動していきます。

（婦団連副会長）

上田「らいてう資料」をみる会

法政大学大原社会問題研究所に「らいてう資料」を寄贈する直前の3月12日「上田プラザ・ゆう」で開催。会の理事、元理事を対象とした会でした。当初は1月に予定していましたがコロナ禍で開くことが出来ませんでした。17点の日記や手紙を展示しま

した。



資料を手にとって見えています

市川房枝からのお歳暮のことが書かれている1966年婦人手帳からはらいてうと市川房枝

との交流がずっと続いていることが分かります。

「初孫のおもいで」（昭和28年）を書いた原稿用紙には付け加えや直しがいくつもあります。何度も推敲した様子がうかがえます。日めくりカレンダーに書かれているメモ。らいてうがどこにでも自分の思いを書き付けていました。今回展示しませんでしたがいりいろな紙の裏のメモがたくさんあります。らいてうの人となりを感じることがあります。「本物を見ると資料の重要性がよく分かる」「もっと大勢の人に見てもらえると良かった」と感想がありました。これから大原社研が資料のデジタル化、公開をし、らいてう研究が進むことを期待しています。

（金輪きみ子）

らいてうの家 オープンイベント



今年は雪が多かった割に4月は暖かい日が続きました。上田の桜の咲く中、4月23日のオープンイベントは、33名の参加者で行うことができました。オーボエ奏者石井聡美さんとピアノ伴奏金子恵さんのコラボは皆を楽しい気分になしてくれました。朝ドラの「お日さま」のテーマソングもオーボエ演奏と知ってとても身近な楽器となり

ました。2月24日から始まったロシアのウクライナ侵攻に深い憤りと悲しみを感じている時、このような穏やかなひと時が持てるのも「平和」でいられるからです。いかに平和が大切な身に染みて感じます。

昨年・今年の特別展示に使用した山本宣治の会所蔵の油絵「告別」の実物大模写も展示されました。らいてうの生きた時代は治安維持法下の言論統制の激しい時代でした。平和のためには言論の自由の抑圧に対して敏感であらねばならないことをこの絵は語っています。

今、女性たちも #me too #with you #ku so にみられるように様々な攻撃にもめげず、「黙らない」「見捨てない」として聞かない社会を聞くことのできる社会へと変えてきています。私たちも「だまされない」「あきらめない」ように深く学び、考え、「力には力を」とする平和と逆行する勢力に対しねばり強く「平和が大事」と声を上げ続ける事です。平和を願う人の輪を一層強め、広げていく努力をしていきたいと思っています。

(倉橋純子)



大月源二「告別」の前で話す三留さん

【事務局日誌】

計報 海部公子さんとのお別れがこんなに早く来るとは、思ってもみませんでした。「いのちの守り手」と名づけられたあなたの九谷色絵の大皿を、どうしてもとおねだりしてから10数年、温かい掌に包み込まれた子ウサギの絵皿は今もらいてうの家の宝物です。戦争の不安が広がる今、わたしたちはらいてうのこのころざしとともに、この絵皿が訴える「いのちの平和」への思いを受けついで行かなくてはならないと思っています。感謝をこめて 合掌。

(米田佐代子)

4月7日 B-STBS「につぼん歴史鑑定」「青

鞆」原本取材撮影

4月14日 第5回常任理事会(オンライン併用)

4月16日~18日 りいてうの家オープン準備

4月23日 りいてうの家オープン

5月2日 B-STBS「につぼん歴史鑑定」

『元始、女性は太陽であった! 婦人運動家・平塚らいてう』放映

2021年度会計監査を受ける

5月12日 第6回理事会(オンライン併用)

5月28日 第23回通常総会・第1回理事会(於東京ウィメンズプラザ)

6月12日 森のめぐみ講座①らいてうの庭の手入れ、峰の原高原の植生観察

6月13日 筑波大実験センター内植物観察

6月16日 NHK特集ドラマ「風よあらしよ」PR

番組の取材(24日も)

第2回理事会(オンライン併用)

お詫びと訂正 前号117号3面写真の青山生子さんは誤りで青木生子さんでした。お詫びして訂正いたします。

おぼろけの会ニュース

発行
平塚らいてうの会
〒112-0002
東京都文京区
小石川
5-10-20-5F
TEL・FAX
03-3818-8626

平和へのメッセージ

コロナ禍で縮小してのオープンでしたが、オーボエ演奏では音色から人類の平和を願う想いが伝わってきました。充実したスタートが出来たことは何よりかと思えます。その様子を地元上田ケールビジョンが取材し、会のホームページにも載せてあります。

＊

その後、団体予約が次々入ってようやく以前の活動が戻るかと思った矢先に感染拡大が始まってしまいました。残念ながら7月の折井さん、8月の米田さんのらいてう講座を中止せざるをえなくなりました。

折井さんの講座はコロナ禍により、ここ3回中止となっています。心待ちにして下さっていた方々がとても残念と言っておられました。

また、米田さんの新しい角度からの「らいてう」を聴きたかったと残念がっておられた会員の方が何人もおられました。

団体予約も中止の連絡が幾つか入って来ましたが、10人前後のグループ来館は密にならないのでかえって好都合だったのか、直後に俳句の会、退

職教職員組合、伊那市の新婦人の会等が来館されています。8月、9月には東御市の男女共同参画課、大阪の新婦人の会、地元上田真田婦人会も来館されて半日かけて見学・学習されていきました。「らいてうの想いは昔の考えではなく、今の時代に当てはまる。勉強になりますね」と感想を語ってくださいました。まさに、「今生きるらいてうのころざし」です。家通信に詳細を掲載してありますのでお読みください。

直接の来館には繋がらないですが、今年度は上田市で、長野県全体の催しがあり、らいてうの平和へのメッセージを発信することができました。

他団体活動への参加

一つは、第65回長野県母親大会です。当初分散会としてらいてうの家見学が計画されたのですが、コロナ蔓延予防でDVDによる紹介参加となりました。オンラインによる全県配信です。らいてうの家が広く紹介でき、母親大会の先駆者らいてうを深く知っていただける良い機会でした。メイン会場では75名、パブリック会場が29会場、個人285名の参加でした。実行委員長は挨拶で、らいてうの言葉「途中、どんなに困難に試されることであろうとも、わたくしは永遠に失望しないでしょう」を、女性解放、平和と生命を守る母親

運動につないで、母親大会の果たす役割の大きさを語りました。



らいてうのパネルも展示された「平和のための信州戦争展」のチラシ

もう一つは、第33回平和のための信州戦争展 in 上田です。

県下4ブロック持ち回りで開催されています。愚かな戦争の実態や証言、映像などを通して平和な世界を築くために大切にしたいことは何かを考え合う会です。展示には、らいてうからのメッセージとして家からもパネルを出しました。ニュース7月号に載せました、山本宣治の農労葬を描いた「告別」(大月源二作・複製)も展示されました。また、ピーストークにはらいてうの会の会員である宮島満里子さん(96歳)が戦争体験の話で参加されています。平和を願う熱い思いが伝わってきました。(沓掛美知子)

らいてう講座のご案内

日時：2022年12月3日

1：30～3：30

(オンラインのみ)

申込：平塚らいてうの会

raichou@nifty.com

締切：11月10日

参加費：会員500円

未会員1000円

講演

「近世～近代日本における
売春観の変容について」

講師

横山百合子さん

国立歴史民俗博物館名誉教授



奥村明史さん ジャズ演奏と祖父博史を語る

2022年7月30日午後1時半、らいてうの家でジャズが演奏されました。演奏をしてくださったのはらいてうと博史の息子敦史さんの息子明史さん（つまりお孫さん）とその御友人、田村雅徳さんでした。

明史さんのピアノと田村さんのベースの息はぴったりと合い、ジャズのフーリングに酔うことのできたとても素敵な時間でした。まず「オンザサニーサイドオブザストリート」でジャズのスイングに乗り、約1名は廊下に出て一人で踊っていました。明史さんがピアノに親しんだのはやはり祖父博史さんのピアノがあったからとのこと。ピアノの1台目は1923年の関東大震災で焼けてしまい、その後成城へ移ってから新しい家計の中で無理をして買ったドイツ製のピアノでした。今は明史さんの家にあり健在とのこと。フルートも何とかして購入。フルートは敦史さんが吹いていたそうです。博史さんはほしものがあるとどんなことがあっても手に入りたい人！ おばあちゃんは博史が逃げ出さないよ

演奏曲目

- 1 On the sunny side of the street（明るい表通りで）
- 2 Love（ラヴ）
- 3 The days of wine and roses（酒とバラの日々）
- 4 Satin doll（サテンドール）
- 5 Confirmation（コンファメーション）
- 6 On green dolphin street
（オングリーンドルフィンストリート）
- 7 I'll close my eyes（瞳をとじて）
- 8 Autumn leaves（枯葉）
- 9 But not for me（バットノットフォーミー）



当日展示された絵や指輪などの思い出の品々

うにいつも気を配っていたようだった。博史は湘南ボーイ！ほそっとしてほやと立っている。真つ正直で人をだますことができない人だった。絵を描くことが好きで日本水彩画研究所へ通った。のちに洋画に転じて1914年第1回二科展に油絵「灰色の海」が入選。しかしあまり画家として評価はされなかった。明史さんとしては展覧会のために描いた作品より、自由に描いた作品が好きだと言われてお持ちくださった。らいてうの実家・曙町（現文京区本駒込）でのらいてうの姉親子を描いたものと仏像の絵でした。1年間お借りしてあるのは立派な額に入った静物画です。

博史さんが指輪を作っている傍らで、明史さんはいつもピアノにさわっているらしかった。その素養があったから大学へ行って音楽のグループに入れたのでしょね。そして退職後の今、お友達とジャズの演奏会を楽しんでいらっしゃる。

博史さんはとてもおしゃれで服装のセンスもよかった。らいてうさんの洋服も博史さんのセンスでえらんだのでは・・・とのこと。途中、豪雨の訪問もありましたが、ジャズにはかなわずあつさり退散。おかげで夜の星空もしっかり輝いてくれました。来年も楽しみにしています。（杉山洋子）

BS-TBS 「歴史鑑定・平塚らいてう」を見て 事実の改変と

全く触れられていない重要な事実と

2022年5月2日、BS-TBSの番組「につぼん！歴史鑑定―婦人運動家・平塚らいてう」が放映されました。



BS-TBS「歴史鑑定」ホームページのタイトル画像

1961年にインタビューしたらいてうの肉声を随所に交えながら、多くの写真、ドラマ、アニメ表現、字幕の説明文などではじめてらいてうを知る視聴者にもわかりやすく伝える工夫がされて、ジェンダー平等の先駆者としてのらいてうを紹介する貴重な番組でした。しかし、事実と異なる表現も見受けられ、らいてうの真の姿を伝えるために幾つかの点を指摘しておきたいと思います。

*

塩原事件―らいてうの人生を変えたスキャンダル、『青鞥』発刊のきっかけとなった事件であるとするのは妥当な評価なのですが、その内容紹介にいくつかの事実誤認が見受けられます。まず、森田草平と塩原にでかける前、部屋を片付け、約束の時間までに間があつたので線香を立てて最後の座禅をしました。それが番組では、「仏壇に線

香をあげ」と全く違う行為とされています。

次に塩原で雪の尾頭峠に分け入った断崖の上でのシーンでは草平の言葉と懐剣を誰が捨てたかに事実との違いがあります。番組では草平は「私はあなたを殺せない。私を愛してもいないあなたを殺すことはできない。もう殺すのはやめた！」と言います。しかし、らいてう自伝によれば「僕は意気地のない人間なのだ、人を殺すことなどできない。あなたなら殺せると思ったけれど、だめだ」と言っています。

そして懐剣を谷底に投げ捨てたのはらいてうではなく草平でした。ところが番組ではらいてうが懐剣を投げ捨てたとされています。懐剣は母の嫁入り道具で投げ捨てるなど考えられないものでした。であるにもかかわらず、このような改変が行われたのは、このシーンを若い男女の愛の破綻とらいてうの怒りによるそこから再生として描こうという意図によるものでしょう。ですからドラマでは、東大卒の青年との恋とされ草平に故郷に妻子があり、東京では同棲している女性と暮らしていることは触れられません。二人の関係は恋愛ではなく、しかし互いに惹かれ合うという理解しづらい関係であり、それをわかりやすい恋愛ドラマに改変しています。又、新聞などによるらいてうへの非難と揶揄が集中したことは紹介されても草平がこの事件を小説「煤煙」として文壇デビューしたことは番組上では伝えられません。同じ事件の当事者でありながら、この社会的評価の差異にさらされたことこそがらいてうに『青鞥』の発刊の辞を書かせる力を与えたと思われま

*



番組で使用されたらいてう、博史の写真。
1927年に転居した成城の家の前で。当時、らいてう41歳

らいてうが事実婚を選択した場面に、ずっと後の成城の家の前での二人の写真の使用は適切ではありません。

*

新婦人協会では、体調不良だけでなく周囲に理解されないという

孤独感により女性解放運動から身を引いたとするのは事実と異なります。

*

療養後、協同自治社会を目指して成城の地で消費組合運動を組合長として戦時まで続けたことは全く紹介されません。

戦後の日本国憲法に力を得て平和と婦人運動に生涯をかけた人としてらいてうを詳しく追った番組だけに、わかりやすくということとで事実改変していることは歴史番組としては許されないのではないのでしょうか。又らいてうの運動経験の中で最長の9年持続した消費組合の活動に全く触れられないことなどもらいてうの真の姿をあいまいにし残念です。

(三留弥生)

シリーズ「新婦人協会の人々」No.12



有島武郎

新婦人協会の発足にあたって、らいてうは有島武郎に後援を依頼した。有島は早くそれに応じ、らいてうと同じ田端に住む、元台湾銀行頭取夫人の佐田文世を紹介した。文世は、婦人の経済的独立を主張し、自身も台湾料理店を開いて働く、当時としては異色の「名流婦人」であったが、新婦人協会のための寄付に応じるなど協力をおしまなかった。

さかのぼって1915年、奥村博史が肺結核治療のために茅ヶ崎の南湖院に入院していたとき、有島の妻安子も同じ病で、平塚の杏雲堂病院に入院中であった。有島は、病床の妻を慰めるために、友人知人らに妻宛の手紙を頼んだ。博史がそれに応えて、安子との間に手紙が交わされたが、やがて安子は28歳の若さで死去した。この報に接した博史が、暑い時期には貴重な白菊を携えてかけつけると、有島はその心遣いを大変喜んだという。

1917年5月、妻の死をモチーフにした戯曲「死と其の前後」を発表、これを皮切りに旺盛な

創作活動を開始した。この戯曲は、同年10月に芸術座の研究劇として神楽坂芸術倶楽部で上演され、らいてうと博史は有島から招待されて観劇している。

1920年4月末、新婦人協会は研究部を政治法律部・社会部・教育部に分けた。政治法律部ではさつそく「政治法律夏期講習会」を計画した。この講習会は、7月25日から31日までの7日間、午前9時から11時の時間帯で、お茶の水の東京女子高等師範学校内の作楽館を会場として開催された。

第5日目にあたる7月29日には、午後6時から「科外講演」が組まれ一般公開された。講師と演題は、布施辰治「婦人問題と法律上の女」、長谷川如是閑「性的生活と社会問題」、そして有島武郎の「文芸雑感」であった。有島は雑誌『白樺』の同人で、前年の1919年、本能に従って生きる女性・葉子を主人公にした「或る女」を発表し、知識人や学生の間にセンセーションを巻き起こしていた。

『女性同盟』2号には、この「科外講演」について、「会するもの婦人ばかり約三百名、停電の故障でローソクをつけて伺った次第でしたが、いい集まりで御座いました」という報告がされている。

また、『女性同盟』創刊号には、発会式までの寄付金の総額は985円という会計報告とともに「発会式以前の寄付者」として16名の氏名が公表されているが、もちろん有島武郎の名前もある。

(折井美耶子)

【事務局日誌】

- 7月22日 第1回代表理事会(オンライン併用)
7月30日 らいてう講座①音楽鑑賞と星空観察会
ジャズコンサートと博史のお話
講師・奥村明史さん(ピアノ)
田村雅徳さん(ベースギター)
夏の星座鑑賞 講師・安達永真さん
(於らいてうの家)
8月24日 NHKドラマ「風よ あらしよ」PR
番組放映(31日も)
9月4日 BSプレミアム「風よ あらしよ」放映(11、18日も)
9月6日 法政大学大原社会問題研究所「平塚らいてう資料研究会」(オンライン参加)
9月15日 第3回理事会(オンライン併用)
9月17日 らいてう講座②地元「らいてう ゆかりの女性たち」講師・杉山洋子さん
(於らいてうの家)

▼会費・ご寄付などのご送金いつもありがとうございます
います。2022年度の会費未納の方はご送金を
よろしく願います。

●郵便振替口座

00150-9-553046

NPO・平塚らいてうの会

●みずほ銀行新宿西口支店 普通預金

口座番号 4815505

特定非営利活動法人平塚らいてうの会